

# 事象キャンセルについて

— 東南アジア大陸部諸言語の観点から —

加藤 昌彦

## 0. はじめに

まえがきに述べたように、慶應義塾大学東南アジア諸言語研究会においては、2018 年から東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルについて検討してきた。本報告書の目的は、ベトナム語(Vietnamese)、クメール語(Khmer)、ラオ語(Lao)、タイ語(Thai)、ポー・カレン語(Pwo Karen)、ロンウォー語(Lhaovo)、ビルマ語(Burmese)の事象キャンセルの様相を、同一の調査票を用いて対照可能な形で示すことである。本章では、調査票および各言語の報告を理解するための前提となる、事象キャンセルにまつわる様々な問題について論じる。

以降、第1節では「事象キャンセル」という現象についての紹介を行い、「事象キャンセル」という用語の妥当性についても述べる。第2節では事象キャンセルで何が否定されるかについて論じる。第3節では事象キャンセルが可能とされている言語間で事象キャンセルが容認される度合いが大きく異なることを見る。第4節では日本語の事象キャンセルの特徴について、先行研究を批判しながら一般化することを試みる。第5節では、東南アジア大陸部諸言語の一例として、ビルマ語を取り上げ、やはりその事象キャンセルについての一般化を試みる。第6節では本巻所収の「事象キャンセル調査票」について説明する。第7節では、本研究会で明らかになったことのいくつかを指摘する。第8節はまとめである。

## 1. 事象キャンセル

Event cancellation という用語を使った研究としてよく知られているのは Tsujimura (2003) である<sup>1</sup>。この用語の日本語訳としては「事象キャンセル」あるいは「事象キャンセレーション」が考えられるが、本章では前者を採用する。何らかの事象が既に成立したことを表す発話の後に、その事象の成立を否定する発話が現れる現象を、この用語は指している。例えば日本語では、池上(1981: 249–283)が示した次のような文が容認されることがある。池上の研究はこの現象の先駆的な研究のひとつである。

- (1) 燃やしたけれど、燃えなかった。

この文は「燃やしたけれど」という従属節と「燃えなかった」という主節の2つの節からな

---

<sup>1</sup> この用語を誰が初めて使ったかについて筆者はまだ結論を得ていない。Tsujimura (2003)の前にこの用語を使った研究として Chae (2002)がある。

る。動詞「燃やす」は、その意味の中に、何らかの物体が燃えるという事象を含む。最初の節はこの動詞を使って「燃やした」と言っているのだから、何かが燃えるという事象も成立したはずである。ところが、続く 2 番目の節では、燃えるという事象が成立しなかったと言っている。すなわち、最初の節と 2 番目の節は論理的に矛盾する関係にある。この文を矛盾がないように解釈する 1 つの方法は、「燃えた」という最初の発言の内容を話者自身が言外に撤回した、すなわちキャンセルしたと見なすことである。例えば、「燃やしたと言ったが、実はその発言内容は誤りだった」と話者が言外に考えているという推意を行えば、「燃えなかった」の部分を論理的な矛盾なしに解釈することができる。このように、何らかの事象について、その事象が成立したことを表す発話の内容を話者がその後で撤回しているように見える現象を、本巻では事象キャンセルと呼ぶことにする。この現象は(1)のように同一文中で起きることもあれば、(2)のように文の境界を越えて起きることもある。

(2) 燃やした。しかし、燃えなかった。

また、「燃えなかった」のような直接的な否定でなくても、(3)の「あとで見たら全部そのまま残っていた」のように、事象が成立しなかったことを表す別の表現が使われることもある。このような事例も事象キャンセルを含む。

(3) 木の枝を燃やした。しかし、あとで見たら全部そのまま残っていた。

筆者は、日本語とビルマ語の事象キャンセルの対照研究である Kato (2018)の草稿を書いて提出したときに、event cancellation という用語について査読者から批判を頂戴した。それは、現実世界で既に起こった事象を発話によってキャンセルすることはできないのだから、event cancellation という用語は不適切であるという内容だった。そこで草稿の修正にあたって、筆者はこの批判をかわすため、result cancellation (結果キャンセル)という用語を用いた。しかし、これとて現実世界で起こった結果は発話によって取り消すことはできないのだから、同じ問題が残る。この査読者の意見は論理的に考えて正しい。ただ、この現象を何と呼べばよいのかという問題が残る。この現象を端的に表す用語を考え出すのは非常に難しい。そこで本報告書では、このような問題があることは心得た上で、事象キャンセルという用語を使うことにする。筆者自身は、「事象が成立したことを表す発話の内容を同一の話者がその後で撤回(=キャンセル)する」という回りくどい言い方を縮約したのが事象キャンセルという用語であると理解している。もちろん、キャンセルの対象となるのは、現実世界の事象ではなく、その事象についての発話内容である。本来なら、「事象についての発話内容キャンセル」とでも言うべきものかもしれない。学術用語は概念を正しく伝えるものであることが望ましいのではあるが、一方で、簡便さも必要である。キャンセルの対象となるのは事象そのものではなく事象についての発話内容であるということを適切に理解した上で使うの

であれば、事象キャンセルという用語を使うことは許されると筆者は考える。なお、ここで用いる事象(event)という用語が表す範囲には、英語の event という単語の典型的な指示対象としての event (出来事)だけでなく、動作(activity)や状態(state)などを始めとするあらゆる事象(state of affairs)を含むものとする。

## 2. 事象キャンセルで何が否定されるか

事象キャンセルの現象において否定され得るのは、典型的には、語彙的使役動詞が表す結果の部分である。例えば、(1)に示した日本語の「燃やす」という動詞が表す意味には、少なくとも、何かに火をつける動作の部分と、何かが燃える結果の部分がある。同様に、日本語の「殺す」という動詞の意味には、少なくとも、生き物に何らかの影響を与える動作と、その生き物が死ぬ結果の部分がある。典型的には、語彙的使役動詞におけるこのような結果の部分、事象キャンセルが成立するときに否定される部分である。しかし、詳しく検討すると、否定される部分の実態は多様である。本節では、事象キャンセルで何が否定されるのかを考える。

この問題を考えるにあたり、まず、ビルマ語の動詞 *ta?*「殺す」の意味を検討する。ビルマ語を例に取るのは、本研究会の研究によって、ビルマ語は事象キャンセルが他の言語に比べて多くの動詞で容認される言語であることが分かってきたからである(Kato [2014], 加藤 [2015], Kato [2018], 岡野[本巻所収]を参照されたい)。ここでは、正確を期すため、Role and Reference Grammar (RRG; Van Valin 1993 および Van Valin and LaPolla 1997 参照)で提案されている語彙アスペクトの表示法を用いる。RRG では動詞の語彙アスペクトの表示を論理構造(logical structure; LS と略される)と呼ぶ。これは、Vendler (1957, 1967)による Actionsart の 4 分類に基づきながら、Dowty (1979)の形式化に倣って作られたものである。ビルマ語の動詞 *ta?*「殺す」の語彙アスペクトは、RRG の LS に従えば、次のように表示できると思われる。

### (4) DO (x, [do' (x, $\emptyset$ )] CAUSE [BECOME dead' (y)])

小文字の do' はこの動詞の表す事象が動作(activity)であることを表す。右側の BECOME は変化を表す部分である。CAUSE は、それより左側にある事象がそれより右側にある事象を引き起こすことを表す。RRG では左端の項に動作者(actor)という macrorole が、右端の項に被動作者(undergoer)という macrorole が付与されるから、x は動作者であり、y 被動作者である。DO は動作主性(agency)を表す部分である。動作主性は動作者が持つ意志(volition)と言い換えてもよい。動作は意志によってもたらされる場合とそうでない場合とがある。意志によらない動作の場合、DO を表示しない。Kato (2014)と加藤(2015)に述べたように、ビルマ語の動詞は一部の動詞を除いて明確に意志動詞(volitional verb)と無意志動詞(non-volitional verb)に分けることができる。語彙レベルで意志動詞には DO が組み込まれており、無意志動詞には組み込まれていない。*ta?* は DO が語彙レベルで組み込まれている動詞のひとつで

ある。全体としてこの LS は、x による何らかの意志的な動作が結果としての「y が死ぬ」という状態変化を引き起こすことを表す。意志(volition)と動作(activity)と結果(result)にのめ着目して因果関係を単純に図示すれば、(5)のようになるだろう。なお、意志と動作はそれぞれものの性質によって意味的に規定することができるが、「結果」は事象間の因果関係によって相対的に規定されるものだから、本来は意志・動作と結果を同列に並べるのは好ましくない。しかし、本章では便宜的に、動作の作用によって生じるあらゆる状況、すなわち、状態、状態変化、新しい局面、被使役動作、等々をまとめる概念を表す用語として「結果」を用いることにする。

(5) Volition → Activity → Result

ビルマ語の動詞  $\text{ʔa?}$ 「殺す」が表す意味においては、意志が原因となって何らかの動作が行われ、その動作が「死ぬ」という結果を引き起こす。(4)の LS はそれを表現している。この LS は英語の murder と同じものである。もちろん、ビルマ語の動詞  $\text{ʔa?}$ と英語の動詞 murder のアスペクト表示が同じであることは、語彙アスペクトにおける共通性を表現するのみであって、この2動詞の意味が他の点においても同じであることを意味しない。

ビルマ語では、(6)に示すとおり、この動詞  $\text{ʔa?}$ を用いた  $\text{ŋà ʔù=gò ʔa?=tè}$ 「俺は彼を殺した」という文の後に、 $\text{dà=bèmê mǎ-ʔè=bú}$ 「しかし死ななかった」という文を続けることが可能である。

- (6)  $\text{ŋà ʔù=gò ʔa?=tè. dà=bèmê mǎ-ʔè=bú.}$   
 1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-死ぬ=NEG  
 「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった。」

ここでは、動詞  $\text{ʔa?}$ がその意味の中に結果事象として含む「死ぬ」という状態変化が否定されている。最初の文を「前件文」、それに続く文を「後件文」と呼ぶことにすれば、後件文において使われる動詞は、(6)の  $\text{ʔè}$ 「死ぬ」のように、前件文の動詞の結果部分を表す動詞であることが多い。しかし、言語によっては、「Vした。しかし、Vすることができなかった」のように前件文の動詞の可能否定表現を後件文として用いることによって、結果を否定することができる。例えば、次のビルマ語例(7)では、(6)が表す状況と同じく、結果がキャンセルされている。 $\text{V=lô mǎ-yâ=bú}$ は不許可や状況的な不可能を表す表現である。

- (7)  $\text{ŋà ʔù=gò ʔa?=tè. dà=bèmê ʔa?=lô mǎ-yâ=bú}$   
 1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS しかし 殺す=ACM NEG-得る=NEG  
 「僕は彼を殺した。しかし、殺すことができなかった。」

例(6)や(7)では結果が否定されているので、(6)や(7)の事象キャンセルを、(5)を使って(8)のように表現してみよう。NOT[ ]は否定の作用している部分を表す。

(8) Volition → Activity → NOT[Result]

また、言語によっては、(7)のような可能否定表現を使うと、動作そのものの開始を否定することができる場合がある。(9)はビルマ語の例である。

(9) nà thâ=dè. dà=bèmê thâ=lô mǎ-yâ=bú  
1SG 立つ=RLS しかし 立つ=ACM NEG-得る=NEG  
「僕は立った。しかし、立つことができなかった。」

この文連続の意味する状況には2つの可能性がある。1つは、動作者が立つための動作を開始したが、例えば脚が痛くて、最終的な立った状態にまで至らなかったという状況である。最終的な立った状態は結果の部分と考えることができるから、この状況を、(8)と同じく(10)のように表示することができる。

(10) Volition → Activity → NOT[Result]

もう1つは、動作者が立とうとしたが、すなわち、立つという動作を行うための意志を持っていたが、脚に力が入らなかった等の理由で、まったく動けなかったという状況である。この状況は、(11)のように表示することができる。

(11) Volition → NOT[Activity → Result]

ここでは、動作そのものが否定され、否定されないのは意志のみである。ビルマ語において、このような、動作そのものが開始しないという解釈は、thâ「立つ」以外に、thàin「座る」、pyé「走る」、cau?「歩く」、yi「笑う」のような、日常的によく行われる基本的な動作を表す自動詞でのみ可能である(Kato 2014, 加藤 2015)。

ビルマ語の事象キャンセルについて、Kato (2014)と加藤(2015)は、ビルマ語の意志動詞は終端への到達(reaching of the end point)を意味論的に含意(entail)しないと考えた。そのためにビルマ語では、意志動詞の意味構造における結果部分を否定することが可能になると一般化した。(11)に示したようなキャンセルについては、日常的な単純な動作そのものが終端と見なされたときに可能となると解釈した。

注意すべきは、ビルマ語のような、事象キャンセルが広範に容認される言語においても、(12)のように表示されるような、意志から結果までを含めた動作の過程すべてがキャンセルされることはないということである。したがって、(9)は、最初から立つ意志がなかった状況を表すことはない。

(12) NOT[Volition → Activity → Result]

これはおそらく、Grice (1975)の言う「質の公理」(maxim of quality)に違反するからだろう。(12)が表すような事象キャンセルがもし可能であれば、前件文が表す内容は嘘だったことになる。これは質の公理に違反する。だから、当然のことながら、ビルマ語においても、(13)や(14)のように前件文の動詞をそのままの形で後件文において否定することは許されない<sup>2</sup>。(7)や(9)の後件文においては、前件文の動詞を用いて否定文を作っているが、動詞をそのまま否定しているのではなく、可能表現と共起させて否定していることに注意されたい。

(13) \*ŋà thâ=dè. dà=bèmê mǎ-thâ=bú.  
 1SG 立った=RLS しかし NEG-立つ=NEG  
 「僕は立った。しかし、立たなかった。」

(14) \*ŋà ŋû=gò ʔaʔ=tè. dà=bèmê mǎ-ʔaʔ=phú.  
 1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-殺す=NEG  
 「僕は彼を殺した。しかし、殺さなかった。」

さらに、事象キャンセルの現象においては注意すべき重要な点がある。それは、事象キャンセルが、意志的な(volitional)動作の場合にしか起きないということである。次のビルマ語の例を見ていただきたい。

(15) \*ŋà ʔè=dè. dà=bèmê ʔè=lò mǎ-yâ=bú  
 1SG 死ぬ=RLS しかし 死ぬ=ACM NEG-得る=NEG  
 「僕は死んだ。しかし、死ぬことができなかった。」

この(15)は容認されない。それは、動詞 ʔè「死ぬ」が無意志動詞であることに原因があると考えられる。この点に関して、Kato (2014)と加藤(2015)は、事象キャンセルが意志動詞(volitional verb)にしか生じないという一般化を行った。これには普遍性が見られるようであり、日本語については Tsujimura (2003)や江連(2013)に指摘がある。通言語学的には、Martin (2020)が、事象キャンセル(Martin の言葉では zero-change use of causative predicates 「使役述語のゼロ変化用法」)が使役述語(causative predicate)のうち動作主用法(agentive use)にのみ起きるという一般化を行っている。ビルマ語を含む東南アジア大陸部諸言語においては、一般的に、意志性(volitionality)すなわち動作主性(agentivity)が動詞レベルで指定されている。言い換えると、意志動詞(volitional verb)と無意志動詞(non-volitional verb)がはっきりと分かれて

<sup>2</sup> 最近の言語学の論文では、文脈的に容認されないことを「#」で示すことが多い。この記号を使うならば、(11)と(12)は、「\*」を使わず、後件文に「#」を付すべきところである。しかし、東南アジア大陸部諸言語では、容認度の低さが統語論、意味論、統語論といったいかなる言語学上のレベルに帰するかを判断しにくいことがままあるため、本章ではこのような場合においても「\*」を用いることにする。

いる<sup>3</sup>。そのような言語、例えばビルマ語についての「事象キャンセルは意志動詞にしか起きない」という一般化は、「事象キャンセルは述語の動作主用法(agentive use)にしか起きない」という一般化とほぼ同義である。しかし、Sato (2021)が示したインドネシア語の事例<sup>4</sup>のように、言語によっては、同じ動詞が動作主性を持つ場合と持たない場合とがあり、そのような言語を含めて考えれば、述語が動作主性を持つ場合にのみ事象キャンセルが可能であるという Martin (2020)の一般化のほうがより普遍性を持つ。Martin の一般化を、「事象キャンセル」という用語と(4)に示した RRG の論理構造(logical structure)を用いて表現すれば、「事象キャンセルは LS に DO を持つ場合にのみ可能である」ということになる。

このように、事象キャンセルにおいては、(8)の表示のように、意志的な述語における結果が否定される。加えて、比較的稀な事例として、(11)に示したように意志的な述語における動作が否定されることもある。では、より一層細かく観察すると、事象キャンセルにはどのようなケースがあるのか。Kato (2014)と加藤(2015)で示したビルマ語の様々な事象キャンセルを参考にすると、より具体的には、通言語的に少なくとも次の(a)から(i)に挙げるような事象キャンセルが存在すると考えられる。ビルマ語においては、話者による判断の差はあるものの、これらすべてが完全に容認可能あるいはそれに準じる容認度を示す。なお、下記の各ケースに示す日本語の事象キャンセル例は、それが容認される言語における事象キャンセルを直訳したものというように捉えていただきたい。日本語においてこれらの文連続が容認されるとは限らない。

- (a) 対象物の物理的変化が否定されるケース。「殺した。しかし、死ななかった」「燃やした。しかし、燃えなかった」のような、語彙的使役動詞を用いた事象キャンセルである。「殺す」に対する「死ぬ」、「燃やす」に対する「燃える」の部分、すなわち結果の部分が発見される。Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (b) 対象物に対する知覚が否定されるケース。「見た。しかし、(暗くて)見えなかった」「聞いた。しかし、(周りがうるさくて)聞こえなかった」のような事象キャンセルである。

<sup>3</sup> 意志・無意志を随意・不随意という用語に置き換えることも可能である。随意・不随意という用語を用いた研究として、例えば三上(1984)、坂本(1985, 1994)、峰岸(1986, 2007)がある。このうち動詞分類としての随意動詞・不随意動詞という用語を用いているのは坂本(1985, 1994)である。峰岸(1986)はさらに進んでクメール語の動詞を「「する」動詞」「「なる」動詞」という用語を用いて分類している。峰岸(1986)は「する」「なる」という用語を用いることについて、「クメール語の「する」動詞は、行為の企てを含意はするが、行為の達成までは含意しない。外的状況によってはうまくいかない行為もあるので、厳密には「意志」により「随意」には行えない」という理由を挙げる(p. 48)。この指摘は、東南アジアの言語で意志動詞の表す事象が成立しない場合もあることを早い時期に示唆した点で注目に値する。なお、峰岸(2007: 211)によれば、随意動詞・不随意動詞という用語は「不随意筋」(involuntary muscle)という用語に着想を得て作られた造語であるという。

<sup>4</sup> Sato (2021)によれば、例えばインドネシア語の他動詞 *menutup* 「閉める」は、意志的な行為にも非意志的な行為にも用いることができる。

- このケースでは、「見ようとする動作」や「聞こうとする動作」は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (c) 対象物の移動が否定されるケース。「(小石を)投げた。しかし、(小石は)手にくっついて飛んでいかなかった」「(山芋を)抜いた。しかし、抜けなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、「小石を飛ばすための動作」や「山芋を抜こうとする動作」は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (d) 対象物との接触が否定されるケース。「(彼を)叩いた。しかし、(彼に手が)届かなかった」「(彼を)蹴った。しかし、(彼に足が)届かなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、「手を動かす動作」や「脚部を動かす動作」は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (e) 移動において目的地への到達が否定されるケース。「(東京に)行った。しかし、(東京に)着かなかった」「(ここに)来た。しかし、(ここに)着かなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、目的地に向かう移動自体は既に開始されているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (f) 作成を表す動作において作成物の出現が否定されるケース。「(人形を)作った。しかし、(最終的に人形は)出来上がらなかった」「(家を)建てた。しかし、(最終的に家は)出来上がらなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、人形や家は途中までは出来上がっている。途中まで作成した動作は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (g) 対象物の獲得が否定されるケース。「(本を)買った。しかし、入手できなかった」「(金を)盗んだ。しかし、入手できなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、「書店に入って本の有無を確かめる動作」や「金を盗むために他人の家に押し入る動作」は既に行われている。そのため、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (h) 発話において発声が否定されるケース。「話した。しかし、(恐怖で)声が出なかった」「歌った。しかし、(極度の緊張のため)声が出なかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、声を出すための筋肉活動が既に行われていたが声が出なかった場合と、筋肉活動が一切行われなかった場合の2通りが考えられる。前者は Volition → Activity → NOT[Result]と表示でき、後者は Volition → NOT[Activity → Result]と表示できる。
- (i) 飲食において飲食物の摂取が否定されるケース。「(魚を)食べた。しかし、(まずくて)喉を通らなかった」「(酒を)飲んだ。しかし、(まずくて)喉を通らなかった」のような事象キャンセルである。このケースでは、飲食物を口に入れるまでの動作は行われている(「食べる」の場合は咀嚼も行われている可能性がある)から、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。
- (j) 自己完結的な動作の最終状態が否定されるケース。(9)を(10)のような意味で解釈するようなケースである。すなわち、「立った。しかし、(身体を動かし始めたものの、脚が痛くて)直立した姿勢には至らなかった」「座った。しかし、(身体を動かし始めたものの、



脚が痛くて)着席した姿勢には至らなかった」といった事象キャンセルである。このケースでは、身体を動かす動作は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

- (k) 自己完結的な動作の開始が否定されるケース。(9)を(11)のような意味で解釈するようなケースである。すなわち、「立った。しかし、(体に力が入らず、)まったく動けなかった」「座った。しかし、(脚の痛みが強すぎて、)まったく動けなかった」といった事象キャンセルである。このケースでは、身体を動かす動作そのものが開始していないから、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できる。
- (l) 使役行為における被使役者の動作や感情が否定されるケース。「(彼を)踊らせた。しかし、(彼は)踊らなかった」「(彼を)行かせた。しかし、(彼は)行かなかった」というような、使役を表す述語を前件文に使った事象キャンセルである。このケースでは、「踊る」「行く」といった動作を被使役者に行わせるための命令や指示などの発話行為は既に行われているから、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。「踊る」「行く」といった動作が Result 部分に相当する。また、「(彼に)売った。しかし、(彼は)買わなかった」「(彼に)与えた。しかし、(彼は)受け取らなかった」における「売る」や「与える」のように、被使役的な動作(つまり「売る」)にとっての「買う」、「与える」にとっての「受け取る」のような動作)を意味に含む動詞を前件文に使った事象キャンセルもここに含めることができる。売買や授受のための交渉が、発話あるいは文書のやり取り等の動作によって既に行われているから、これも Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。「買う」「受け取る」といった動作が Result 部分に相当する。

この中には、(h)の発声や(k)の自己完結的な動作の開始のように、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できるものがあるので、事象キャンセルで否定され得る部分の最大値は「意志を除いた部分」と言える。しかし、他のケースは Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。

ここで、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できる(h)と(k)のケースについて、ビルマ語に即して詳しく考えてみる。(k)のタイプの事象キャンセルが可能な動詞は、既に述べたように、thâ「立つ」以外に、thàin「座る」、pyé「走る」、cau?「歩く」、yi「笑う」のような、日常的によく行われる基本的な動作を表す自動詞である。注意すべきは、これらの動詞のすべてが、(j)の自己完結的な動作の最終状態が否定されるケースでも使用可能なことである。具体的には、「立とうとして途中まで身体を動かしたが、直立した状態にならなかった」「座ろうとして途中まで身体を動かしたが、着席した状態にならなかった」「走ろうとして脚を交互に動かしたが、“走る”と呼べる速度に達しなかった」「歩こうとして脚を出したが、移動はできなかった」「笑おうとして顔の表情を変えたが、“笑う”と呼べる表情にまで達しなかった」といった状況を表すことができるのである。これらはすべて(j)のタイプの事象キャンセルが表す状況であり、Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる。また、(h)の

発声が否定されるケースにおいても、上で述べたように、Volition → NOT[Activity → Result]だけでなく Volition → Activity → NOT[Result]と表示できる場合もある。このようなことを考えると、Volition → NOT[Activity → Result]と表示できるような事象キャンセルは、一部の動詞にのみ見られる特殊なケースだと言えるのではないか。このようなケースにおいては、Activity そのものが Result の一部として捉えられていると見なすことにしよう。

以上の議論から、本節の最初に設定した「事象キャンセルで何が否定されるのか」という問いに対して次のように答えることができる。事象キャンセルによって否定されるのは、Volition → Activity → Result という流れのうち結果の部分である(特殊なケースでは動作も結果に含む)。そして、事象キャンセルによって表されるのは、動作者が何らかの結果を目論んで動作を遂行したのにその結果が生じないという意味である(特殊なケースでは、動作者が動作を遂行する意志を持ったのにその動作が遂行されないという意味にもなる)。

さらに本章では、上の(a)から(l)で論じた様々な事象における「Activity → Result」の部分すべて Vendler (1957)の言う達成(accomplishment)に含めて考える。これらの中には、拠って立つ分析の枠組みや採用する分類基準によっては到達(achievement)あるいは動作(activity; 「活動」と訳すほうが正確かもしれない)と捉えられるものも含む。例えば、日本語の「殺す」の表す事象は到達と見なされ得るし、「見る」の表す事象は通常は動作(活動)と見なされる。しかし、事象キャンセルの観点からはこれらを一括して達成と捉えるほうが便利であるため、本章では、上で示した「Activity → Result」の部分すべて達成と呼び、この部分を語彙化した動詞を達成動詞と呼ぶ。また、Kato (2018)の冒頭(p. 173)に述べたように、言語が違えば、表面上は似た意味の動詞が Vendler の 4 分類における異なるカテゴリーに入るのはよくあることである。したがって、(a)から(l)の「Activity → Result」の部分語彙化した動詞がすべて達成動詞と解釈され得るような言語があったとしてもおかしくはない。

### 3. 事象キャンセルが可能な言語

事象キャンセルにおいて観察されるような、最終局面までたどりつかない達成(accomplishment)を、この分野における重要な研究である Martin (2019)は、不成就達成<sup>5</sup>(non-culminating accomplishment)と呼んでいる。彼女によれば、不成就達成は、ヒンディー語(Hindi)、タミール語(Tamil)、北京語(Mandarin Chinese)、韓国語(Korean)、日本語(Japanese)、タイ語(Thai)、ビルマ語(Burmese)、セイリッシュ語(Salish languages)、ワカシャン語(Wakashan languages)、タガログ語(Tagalog)、マラガシ語(Malagasy)、アタヤル語群(Atayal)、カラチャイ・バルカル語(Karachay-Balkar)、アブイ語(Abui)などで報告されているという(各言語の当該現象について報告した文献については Martin の当該論文を参照されたい)。これ以外にも、マラーティー語(Marathi; Pardeshi et al. [2014])や、下で述べるモン語(Mon)、白メオ語(White Hmong)などをここに加えることができる。これらの言語では、多かれ少なかれ事象キャンセルの現象が見

<sup>5</sup> 不成就達成というのは筆者による暫定的な訳語である。

られると言ってよいだろう。

東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルに言及した研究としては、タイ語(Thai)についての Koenig and Muansuwan (2000)、Jenny (2001)、Thepkanjana and Uehara (2009)、Thepkanjana and Uehara (2010)、ビルマ語(Burmese)についての Kato (2014)、加藤(2015)、Kato (2018)、モン語(Mon)についての Jenny (2005: 75–77, 132–134, 156–157)、白メオ語(White Hmong)についての Jarkey (2015: 153–156)などがある。東南アジア島嶼部の諸言語でも事象キャンセルの存在が報告されており、例えば、タガログ語(Tagalog)についての Dell (1983)、Santiago (2015)、インドネシア語(Indonesian)についての Sato (2021)などがある。

一方で、Martin (2019)によれば、英語(English)やドイツ語(German)などのゲルマン諸語(Germanic languages)やフランス語(French)などのロマンス諸語(Romance languages)では、不成就達成(non-culminating accomplishment)が、より制限されたセット(a more restricted set)でしか起きないという。言い換えれば、これらの言語では事象キャンセルが起きにくい。英語については、池上(1981)や Ikegami (1981)において日本語と比べたときの事象キャンセルのしにくさについて詳しく論じられている。同様に、Tai (1984)が中国語との比較において、また Singh (1991)がヒンディー語との比較において、英語の事象キャンセルのしにくさに言及している。例えば Ikegami (1985)は、英語の(16)と(17)が容認されないことを指摘している。同様に、Nathan Badenoch (p.c., 2022年8月21日)によれば、英語では、(16)や(17)のような過去形を取って現れた動詞だけでなく、(18)のように仮定節の中に非過去形で現れた動詞の意味をキャンセルすることもできない。(18)を適切にするには“Even if you try to kill that guy, he won't die.”と言い換えなければならないという。

(16) \*I burned it, but it didn't burn.

(直訳: 私はそれを燃やしたが、燃えなかった。)

(17) \*John killed Mary, but Mary didn't die.

(直訳: ジョンはメアリーを殺したが、メアリーは死ななかった。)

(18) \*Even if you kill that guy, he won't die.

(直訳: たとえそいつを殺しても、死なないだろう。)

実は、事象キャンセルが可能とされている言語の中でも、事象キャンセルの容認度や事象キャンセルが適用できる動詞の範囲は言語によって非常に異なる。この点は先行研究においてあまり注目されてこなかった。しかし、一部の研究、例えば Thepkanjana and Uehara (2010) は英語と対照しながら中国語とタイ語の違いを論じており、Kato (2018)はビルマ語と日本語の事象キャンセルの違いを論じている。ビルマ語と日本語の違いを示すため、下の(19)から(26)に Kato (2018: 177–178)からビルマ語の例を引く。

- (19) mí eô=dê. dà=bèmê mã-láun=bú.  
火 燃やす=RLS しかし NEG-燃える=NEG  
「(それを)燃やした。しかし、燃えなかった。」
- (20) tû=gò ʔaʔ=tê. dà=bèmê mã-tê=bú.  
3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-死ぬ=NEG  
「彼を殺した。しかし、死ななかった。」
- (21) chā=dê. dà=bèmê mã-cā=bú.  
落とす=RLS しかし NEG-落ちる=NEG  
「落とした。しかし、落ちなかった。」
- (22) chó=dê. dà=bèmê mã-có=bú.  
折る=RLS しかし NEG-折れる=NEG  
「折った。しかし、折れなかった。」
- (23) hlé=dê. dà=bèmê mã-lé=bú.  
倒す=RLS しかし NEG-倒れる=NEG  
「倒した。しかし、倒れなかった。」
- (24) phwín=dê. dà=bèmê mã-pwín=bú.  
あける=RLS しかし NEG-あく=NEG  
「あけた。しかし、あかなかった。」
- (25) phyεʔ=tê. dà=bèmê mã-pyεʔ=phú.  
壊す=RLS しかし NEG-壊れる=NEG  
「壊した。しかし、壊れなかった。」
- (26) kaʔ=tê. dà=bèmê mã-kaʔ=bú.  
くっつける=RLS しかし NEG-くっつく=NEG  
「くっつけた。しかし、くっつかなかった。」

ビルマ語では、上に挙げた(19)から(26)の事象キャンセルすべてが可能である。大部分の話者がこのような文連続を容認すると言ってよい。ところが、日本語はこれとはかなり違う様相を見せる。実を言えば、筆者の判断では、(19)から(26)の各例文につけた日本語訳はどれも容認することができない。これだけでなく、これまでの研究で容認可能とされている多くの例文を筆者は不自然と感じる。例えば、池上(1981)が示した(1)の例は筆者の判断では非常に不自然である。そのような話者がいる一方で、事象キャンセルをかなり容認する日本語話者がいるのも事実である。また、事象キャンセルを容認する日本語話者であっても、用いる動詞によって適格性の判断が異なるという状況もある。

日本語話者の事象キャンセルに関する適格性判断については、宮島(1985)による非常に示唆的な研究がある。宮島は、様々な意味を持つ16個の動詞を使って(27)や(28)のような例文を作り、各100人の日本語話者からなる3つのグループA、B、Cに対してアンケートを行

い、それぞれの文について、「自然」「やや不自然だが使われる」「まったく不自然」のいずれであるかを尋ねた。アンケートに使われた文はグループ間で少しずつ異なる。(27)と(28)はいずれも A グループに対して尋ねた文である。

(27) 木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった。

(28) 太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった。

宮島(1985)の報告によれば、被調査者 100 人のこれらの文に対する判断は表 1 に示すとおりである。

表 1: 「燃やす」を用いた例文(27)と「殺す」を用いた例文(28)に対する日本語話者の判断(宮島[1985]のデータに基づく)

	自然	やや不自然だが使われる	まったく不自然	計
例文(27)	30	48	22	100
例文(28)	7	18	75	100

池上(1981)は(1)の「燃やしたけれど、燃えなかった」を容認されると見なした。しかし、これに類似する(27)の「木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった」に対して、100 人中 70 人 [48 人+22 人]が多かれ少なかれ不自然さを感じたことになる。一方、池上は「彼を殺したけれど、死ななかった」を容認されないと見なした。しかし、これに類似する(28)の「太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった」に対して、100 人中 25 人 [7 人+18 人]が「使われる」と判断したことになる。このことは、日本語の事象キャンセルの適否が簡単には判断できないことを物語る。そして重要なことは、「まったく不自然」と考えた母語話者が(27)では 22 人、(28)では 75 人と、いずれの場合にも少なからず存在したということである。この状況は、(19)から(26)の事象キャンセルが大部分の話者によって容認されるビルマ語の状況とはかなり異なると言えるだろう。さらに、次節に述べるように、事象キャンセルで表される状況は日本語とビルマ語とで大きく異なる。そのため、Kato (2018)は、日本語において事象キャンセルが容認される要因とビルマ語において事象キャンセルが容認される要因は別個に検討する必要があると考えた。第 4 節と第 5 節では、Kato (2018)で示した解釈を紹介した上で、より踏み込んだ考察を行う。

#### 4. 日本語の事象キャンセル

前節では、事象キャンセルが可能な言語を挙げた上で、ビルマ語と日本語における事象キャンセルの容認度の違いを示した。この 2 言語を見れば想像がつくように、この現象の容

認度は言語によってかなり異なるのである。本節では、日本語の事象キャンセルの様相を Kato (2018) に沿う形で観察する。日本語の事象キャンセルを取り上げるのは、この現象が多く研究者によって研究されてきたからである。議論の過程で、日本語の事象キャンセルの特徴を、ビルマ語の事象キャンセルの特徴と比べる。そうすることで、日本語とビルマ語の事象キャンセルが容認度だけでなく、意味的にもかなり異なることが分かっていただけるだろう。以下ではまず、日本語の事象キャンセルについての先行研究における解釈を紹介する。

影山(1996: 275–291)は、この現象を語彙概念構造(lexical conceptual structure; LCS と略す)を用いて説明している。LCS は、生成文法理論における語彙アスペクトの表示方式であり、先に見た RRG における LS(logical structure)に相当する。影山によると、「殺す」「燃やす」のような使役的達成動詞(causative accomplishment verb)の語彙アスペクトは、LCS を用いると (29) のように表示できる。ここで、ACT ON は動作の部分に相当する。CAUSE は、その動作によって右側の事象が生じることを表す。BECOME は対象に生じる変化を表し、BE AT は最終的な状態を表す。

(29) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

さらに影山(1996)は図 1 を示し、次のように論じる。英語では ACT ON すなわち動作の部分に視点が置かれる。一方、日本語では BECOME すなわち変化の部分に視点が置かれ、中国語では、BE AT すなわち最終的な状態に視点が置かれる。黒丸は視点が置かれる場所を表す。

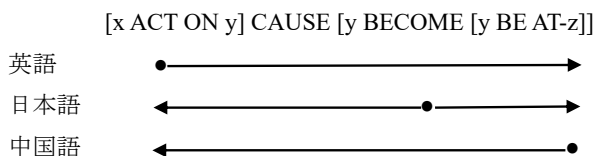


図 1: 影山(1996: 290)の「言語による視点の違い」による説明

影山(1996)の説明によれば、英語で事象キャンセルが難しく、日本語で可能である理由は、両言語の視点の置かれ方の違いにある。英語のように動作に視点が置かれる言語においては、動作の側から結果まで見ることになるため、結果の否定が不可能になるという。一方、日本語では変化部分に視点を置くから、動作の側から結果を見ない。そのためにキャンセルが可能になると主張する。また、中国語では、日本語よりもさらに右側に視点があるため、日本語よりも結果の否定が容易であるという。

Tsujimura (2003)は、日本語の語彙的使役動詞(lexical causative verb)は限界性(telicity)に関して未指定(underspecified)であり、限界的な解釈(telic interpretation)は会話の推意(conversational

implicature)から生じると考える。この解釈によれば、結果の生起(event realization)はあくまで推意であるために、事象キャンセルが可能だということになる。

佐藤(2005: 99–113)は、動作とその結果を意味構造に含む動詞が、メトニミーの作用によって動作のみを表すことになった場合に、事象キャンセルが可能になると考える。また、江連(2006)は、達成動詞(accomplishment)の動作部分に「焦点化操作」(focusing operation)がかかることによってこの現象が可能になると考える。同じく江連(2013)は、日本語の達成動詞は対象への力の働きかけまでを「主要意図作用域」(primary scope of agent's intention)とするためにキャンセルが可能になるとする。さらに、青木・中谷(2013)と Aoki and Nakatani (2013)は、日本語の語彙的使役動詞が限界性に関して未指定であるという Tsujimura (2003)の説を否定した上で、動詞の意味における「プロセス成分の強さ」(strength of the process component)が結果の否定の容認度を高めると主張している。

最後に山川(2004)は、日本語の達成動詞は達成を含意してはいるものの、達成された結果状態が曖昧であるためにキャンセルが可能であると、さらにその曖昧さは、結果状態に段階性があるためその段階性が“non-trivial standard” (Kennedy and McNally 1999)を持つときに生じるとする。

以上が日本語の事象キャンセルに関する先行研究の解釈である。日本語においてこの現象が可能になる理由がいかなるものであるにしても、留意しておかなければならないのは、前節で述べたように、事象キャンセルの容認度が話者によって大きく異なるということである。日本語においては、特定の事象キャンセル例が適格か否かという単純な二分法で考えるべきではない。その点で、アンケートを用いた分析を行っている宮島(1985)、青木・中谷(2013)、Aoki and Nakatani (2013)の研究は評価されるべきである。さらに、Kato (2018)で論じたように、日本語の事象キャンセルは、ビルマ語の事象キャンセルと比べてとき、上で述べた容認度だけでなく、意味の細部においても異なる。日本語の事象キャンセルが表す意味は、ビルマ語のような言語と比べることによって、より一層明らかになる。以下では、こうした視点から、日本語の事象キャンセルに対する筆者なりの解釈を示す。

動詞 *ta?* 「殺す」を用いたビルマ語の(6) *ŋà ŋù=gò ta?=tè. dà=bèmê mǎ-tè=bú* 「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった」と、動詞「殺す」を用いた日本語の(28)「太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった」を比べてみよう。ビルマ語の(6)は典型的に次のような状況を表す。「僕は彼を殺そうと思って、彼をナイフで突き刺した。しかし、彼は元気であり、死んでもいない」というような、動作が実際に「彼」に及んだけれども「彼」が元気であるような状況である。さらには、(6)は動作が対象に到達しなかった状況さえ表すことができる。それは、「僕は彼を殺そうと思ってナイフで突き刺そうとした。しかし、突き出したナイフは届かなかったので、彼は死ななかった」といった状況である。つまり、「彼」は無傷であってもよい。

一方、日本語の(28)を「自然」と考える話者は、例えば次のような状況を考えているのだと思われる。「太郎は次郎を殺そうと思って、次郎をナイフで突き刺した。次郎が動かなく

なったので、太郎は次郎が死んだと思った。しかし、次郎は奇跡的に命を取りとめた」。つまり、次郎がなかば死んだような状況である(言葉は悪いが、「半殺し」の状態である)。

ここでのビルマ語と日本語の違いは明白である。ビルマ語の場合、殺人のもくろみの対象となった相手は物理的影響を一切受けていなくてもよい。しかし、日本語の場合には、殺人の相手はなかば死んだような状態になっているのである。このような状況を思い浮かべた日本語話者は、(28)を「自然」と感じるのだろう。「なかば死んだような状態」と「死ぬ」という事象は異なる事象だから、後者(すなわち死んだこと)を否定しても、前者を否定したことにはならないのである。

次に、燃やす動作を表す動詞を用いたビルマ語の(19) *mí eô=dê. dâ=bêmê mǎ-làun=bú* 「(それを)燃やした。しかし、燃えなかった」と日本語の(27)「木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった」を比べてみよう。(19)が典型的に表す状況は、「私は木の枝を燃やそうとしてマッチに火をつけた。その火を木の枝に当てたが、木の枝は湿っていたためまったく燃えなかった」あるいは、「私は木の枝を燃やそうとしてマッチに火をつけた。その火を木の枝に当てたが、風が吹いてきて火が消えてしまったため、木の枝は燃えなかった」というような、木の枝がまったく燃えていない状況である。

一方、日本語の(27)「木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった」を「自然」と考える話者の多くは、例えば、「私は木の枝に火をつけた。木の枝は少し燃えた。しかし、風が吹いてきたので、火が消えてしまった。そのため、木の枝は全部は燃えなかった」というような状況を考えているのだろう。

ここでもビルマ語と日本語の違いは明白である。ビルマ語の(19)が表す状況では、木の枝はまったく燃えていない。しかし、日本語の(27)は、木の枝が部分的には燃えた状況を表すのである。そのような状況を思い浮かべた日本語話者は、(27)を「自然」と感じるのだろう。「部分的に燃える」という事象と「全部燃える」という事象は異なる事象だから、後者を否定しても、前者を否定したことにはならないのである。

このような対照から分かるのは、ビルマ語では、使役的達成動詞の表す「死ぬ」や「燃える」といった変化がまったく生じていないという読みが可能<sup>6</sup>なのに対して、日本語においては、変化は、「なかば死んだような状態」あるいは「部分的にだけ燃えた状態」という形で、つまり、不完全な形で発生しているということである。これがビルマ語と日本語の大きな違いである。Martin (2019, 2020)は、ビルマ語の事象キャンセルにおけるような変化がまったく起きない解釈を「ゼロ変化解釈」(zero-change interpretation)と呼んでいる。

このように、日本語の事象キャンセルにおいては、不完全な形であれ、結果が生じているのだと考えられる。この点に関して極めて示唆的なのは、宮島(1985)の考察である。宮島は、先に述べた被験者へのアンケートに基づき、動詞による結果否定の容認度を、「自然」が1点、「やや不自然だが使われる」が0.5点、「まったく不自然」が0点として点数化し、それ

<sup>6</sup> Zhang (2018)によれば、中国語においても、達成動詞において変化がまったく生じていないという読みが可能である。



に人数の 100 を掛けて 100 点満点中の点数を出した。その結果を点数が低い順に並べて(30)に引用する。[]でくくった数値がその点数である。なお、宮島が挙げた動詞のうち、使役の達成動詞であると考えられないものは省いた。

- (30) ころす[17.0]、おとす[22.0]、こわす[24.0]、ぬく[26.5]、あける[31.5]、わかす[34.5]、ひろげる[36.0]、いれる[45.3]、うごかす[46.0]、よわめる[46.0]、もやす[53.0]、かわかす[56.5]、ひやす[66.0]

この結果を、容認度の度合いによって 10 点ごとに分けて整理すると、表 2 のようになる。

表 2: 宮島(1985)の数値化に基づく動詞による容認度の差

10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-
ころす	ぬく こわす おとす	ひろげる わかす あける	よわめる うごかす いれる	かわかす もやす	ひやす

表の右端近辺にある「冷やす」「乾かす」「燃やす」などは、結果事象が段階的構造(scalar structure)を持つ(scalar structure については、Hay, Kennedy and Levin [1999], Kennedy and McNally [1999, 2005], Tsujimura [2001]などを参照)。「冷やす」を例にとって考えると、その意味構造に含まれる結果である「冷えた状態」は「かなり冷えた状態」や「少ししか冷えていない状態」など、様々な段階を持つ。結果部分のこの特徴のおかげで「冷やす」は時間的な幅を持つことができ、そのため「5 分間冷やした」と言うことができる。「乾かす」と「燃やす」も同様で、「5 分間乾かした」「5 分間燃やした」と言うことができる。

一方、左端近辺にある「殺す」「抜く」「壊す」「落とす」などは、結果事象が段階的構造を持たない。例えば「死んだ状態」には「かなり死んだ状態」や「少ししか死んでいない状態」などの段階は(通常は)ない。この特徴のため、動詞「殺す」の結果としての「死んだ状態」は時間的な幅を持つことができず、「5 分間殺した」と言うことができない。「抜く」「壊す」「落とす」も同様である。反復事象ではなく単一事象としての読みで「5 分間抜いた」「5 分間壊した」「5 分間落とした」と言うことはできない。

動詞の表す結果が段階的構造を持つ場合、実際に生じた結果のレベルが想定したレベルに達していないという状況を話者が想像しやすい。想定したレベルへの到達を「完全な生起」という言葉で表し、そのレベルに到達していないことを「不完全な生起」(incomplete realization)という言葉で表すと、段階的構造の場合、「完全な生起」(complete realization)が実現せず、「不完全な生起」で終わったという状況が想像しやすいのである。一方、事象が段階的構造を持たない場合、「完全な生起」と「不完全な生起」を話者が想像することは困難である。結論として、日本語では、結果の部分について、「完全には X しなかった」という

解釈が容易なときに結果の否定が容認されやすいということが言える。「完全にはXしない」すなわち「不完全にXする」は、「完全にXする」を含意(entail)しないから、完全にXすることが想定されていた場合に、「完全にはXしなかった」と言っても、矛盾が生じない。日本語においては、このような会話的推意(conversational implicature)が働いて事象キャンセルを可能にしているのではないかとと思われる。(1)の「燃やしたけれど、燃えなかった」を例に取ると、(31)の括弧に入れた部分が推意の部分である。

(31) (完全に燃えることを想定して)燃やしたけれど、(完全には)燃えなかった。

推意が働いているという点において、日本語の事象キャンセルは多分に語用論的な現象であると言える。ただし、不完全な生起の読みを可能にする要因に動詞の段階的構造も関わっているから、意味論的な現象としての側面もある。Kato (2018)は、上で見てきたような議論を経て、結果の不完全な生起という読みが日本語の事象キャンセルを可能にすることを指摘した。この「完全にはXしなかった」という読みは、Martin (2019)の言う非最大達成(non-maximal accomplishment)<sup>7</sup>に相当する。Martinは、非最大達成が、ゼロ変化解釈が可能な不成就達成とは異なる現象であることを、意味論の観点から詳細に議論している(特に第6節)。Martinによれば、非最大達成の読みは、後件文によって粒度(granularity)が粗い粒度レベル(coarse granularity level)から細かい粒度レベル(fine granularity level)へ移行することで起きるといふ。上の説明に則して言えば、「完全にXする」ことの想定が粗い粒度レベルに相当し、「不完全にXした」という認識が細かい粒度レベルに相当する。Martinの説明は筆者の解釈と軌を一にするものである。

さらに、Kato (2018)を出版した後に、杉岡洋子(慶應義塾大学名誉教授)から、「冷やす」「乾かす」「燃やす」のような動詞が表す動作においては、冷える・乾く・燃えるといった結果事象が動作者の手を離れて放置された状態で生起するという点においてコントロールがしにくいいため、「完全にはXしない」という推意が働きやすいのではないかと指摘を受けた。おそらくこの指摘は正しい。「弱める」や「広げる」なども段階的構造を持つ動詞であるが、宮島の調査結果によれば、「冷やす」「乾かす」「燃やす」に比べると事象キャンセルの容認度が低い。「(スイカを)冷やす」「(着物を)乾かす」「(木の枝を)燃やす」といった動作においては、動作者は対象物を放置するのが典型的な状況である。一方で、「(火を)弱める」や「(穴を)広げる」では、対象物は放置されずに動作者のコントロールの及ぶ場所にあることが多い。対象物が動作者の手を離れて放置された状況では結果事象に対する動作者のコントロールがしにくいので、想定した結果が不完全にしか起きなかったという状況が思い浮かべやすい。表2における「弱める」「広げる」と、「冷やす」「乾かす」「燃やす」の差異は、この点に求めることができる。

<sup>7</sup>「非最大達成」(non-maximal accomplishment)も「不成就達成」(non-culminating accomplishment)と同様、筆者による暫定的な訳語である。

池上(1981)と Ikegami (1985)が指摘している日本語と英語の違い、すなわち日本語では事象キャンセルができるが英語では事象キャンセルができないという違いは、おそらく、英語の達成動詞が特別な文脈がない限り結果の完全な成立を表すため、「完全にはXしない」という推意を働かせることができないからだと思われる。英語の達成動詞が結果の完全な成立を表すのが、意味論的な含意(entailment)のためなのか、それとも、不完全な成立という推意自体が英語の中で語用論的に禁じられているためなのかは、分からない。

日本語話者の中には、(27)や(28)の文を聞いて、ビルマ語話者のように、結果がまったく生じないという状況を思い浮かべる話者がいるのも確かである。しかし、そのような話者が少数であることは、宮島の行った調査において、全般的に、事象キャンセル文を「自然」と見なす答えが多くなかったことに現れている。以上の議論から、次のようなことが言える。日本語の事象キャンセルにおいては、「不完全な生起」であっても結果は生起しているのであるから、事象キャンセルを容認する日本語話者の日本語においても、達成動詞は結果を含意(entail)するのである。したがって、厳密に言えば、日本語の「事象キャンセル」において、結果はキャンセルされていないとすることができる。キャンセルされていないのだから、日本語の「事象キャンセル」は、第2節の(a)から(l)のいずれにも当てはまらない。なお、中国語の不成就達成を詳細に論じた Zhang (2018: 18, 49, 235)は、「燃やす」のような動詞において、日本語が中国語と同じようにゼロ変化解釈(zero-change interpretation)を許すと考えているが、ここまでの議論から明らかなように、日本語は中国語と違ってゼロ変化解釈を許さないと考えるべきである。

Kato (2018)では、「不完全な生起」という読み以外に、もうひとつ事象キャンセルの容認度を上げる要因について指摘した。宮島(1985)の調査結果によれば、副詞「一生けんめい」(宮島の漢字表記にしたがう)を含む(33)は(32)よりも容認度が高い。(32)は、「自然」が11人、「やや不自然だが使われる」が22人、「まったく不自然」が66人であるが、(33)は、「自然」が31人、「やや不自然だが使われる」が36人、「まったく不自然」が33人であり、「自然」および「やや不自然だが使われる」の数が増えている。

(32) 柿の実を落としたけれど、落ちなかった。

(33) 一生けんめい、柿の実を落としたけれど、落ちなかった。

「落ちる」という事象が不完全に起きるということは考えにくいから、(33)の容認度がより高いことを、結果の不完全な生起の観点から説明するのは難しい。宮島(1985)は、副詞「一生けんめい」により、動作に焦点が当たったことがその原因だと考える。筆者も Kato (2018)でこれが原因であると考えた。「一生けんめい」は意味的に動作の部分のみを修飾する副詞だから、動作に焦点を当てる。そのため、結果の部分が非焦点化(defocus)される、すなわち目立たなくなるのだろう。これは語用論的な効果である。さらに、結果の部分が目立たなく

なることによって、その後にそれを否定する表現を置いても許容される余地が生まれるのだろう。結果の非焦点化を引き起こす副詞的要素としては、「一生けんめい」「こっそり」「おそるおそる」などのほか、「真剣に」「急いで」「力を込めて」なども候補になる。

しかしながら宮島(1985)の調査で、(33)を「まったく不自然」と考えた被調査者が30%以上もいたという事実は無視できない。「結果の非焦点化」は、事象キャンセルの容認度を高める要因としては、「結果の不完全な生起」よりは弱いと考えられる。したがって、「結果の非焦点化」は、日本語の事象キャンセルを可能にする要因において、副次的な要因であると考えられる。なお、Kato(2018)では述べなかったが、副詞的要素がなくても、文脈の効果によって結果の非焦点化が起きる可能性もあると思われる。

ここまでの議論を下記(i)と(ii)にまとめる。

- (i) 日本語においては、語用論的に、「完全にはXしなかった」という推意、つまり、結果が部分的にのみ起きたという推意が働くことによって事象キャンセルが可能になる。そのため、「結果の不完全な生起」(incomplete realization of the result)の解釈がしやすい事象の場合に事象キャンセルが可能になりやすい。これが日本語の事象キャンセルを可能にする基本的な要因である。日本語の事象キャンセルが表す状況においては、結果事象は部分的だとしても起きている。これは、結果事象がまったく起きていないという解釈が可能なビルマ語の事象キャンセルとの大きな違いである。
- (ii) 日本語では、「結果の非焦点化」も事象キャンセルを可能とする副次的な語用論的要因として働いている。

ここで、先に紹介した先行研究について振り返ってみよう。影山(1996)は、日本語では Lexical Conceptual Structure の BECOME に視点が置かれるので、ACT ON に視点が置かれる英語よりも、結果否定の容認度が高くなるとする。しかし、これだけでは、宮島(1985)が報告した、動詞によって容認度が異なる事実が説明できない。Tsujiura(2003)は、日本語の語彙的使役動詞(lexical causative verb; =使役的達成動詞)は限界性に関して未指定であると述べる。しかし、先ほど述べたとおり、多くの日本語話者において達成動詞は部分的ではあっても結果を含意(entail)するから、この説は妥当ではない。これは Aoki and Nakatani(2013)も指摘するとおりである。佐藤(2005: 99-113)のメトニミー説と江連(2006)の焦点化操作(focusing operation)説は、上で述べた「結果の非焦点化」と同じ方向の考え方であり、部分的には正しいと言えるが、これのみによっては動詞によって容認度が異なるという宮島(1985)の調査結果を説明することができない。江連(2013)の「主要意図作用域」による説明も同様である。青木・中谷(2013)と Aoki and Nakatani(2013)はプロセス成分の強さ(strength of the process component)によって説明しようとする。これは言い換えれば、達成における動作部分の強さによって説明する試みであるが、動詞による容認度の違いは、むしろ「結果の不完全な生起」という結果の部分に重点を置いて説明すべきであると思われる。先行研究の中で唯一、山川(2004)は結果状態に段階性があるときにキャンセルが生じることを指摘しており、この指摘

は的を射ている。ただし、結果の非焦点化が考慮されていないこと、また、結果状態の段階性が“non-trivial standard”(Kennedy and McNally 1999)を持つときに生じるとしていることに再考の余地がある。Kennedy らの trivial standard と non-trivial standard は、段階性における終端(end-point)の有無によって特徴づけられる概念である。trivial standard は終端があり、non-trivial standard は終端がなく文脈依存的である。「完全には X しなかった」という推意が働くためには、終端があるほうがよいとも言えるのであり、したがってむしろ、trivial standard であるほうがキャンセルがしやすい可能性さえある(trivial standard の概念が事象キャンセルの可否に関与しているか否かについては今後の検討を要する)。

先行研究の多くは、日本語の事象キャンセルの容認可能性を 1 つの観点だけから説明しようとした。しかし、上の(i)に示した要因は結果部分の意味にかかわるものであり、逆に、(ii)に示した要因はその結果部分そのものを目立たなくさせるものなので、これらを 1 つにまとめることは不可能だろう。

さらに付け加えれば、日本語の場合、事象キャンセルの主要な要因である(i)を適用できる度合いが母語話者によって大きく異なるのだと思われる。先ほど述べたように、筆者の日本語では、(19)から(26)の各例文につけた日本語訳はいずれも容認することができないし、池上が不可能とした「彼を殺したけれど、死ななかつた」のみならず、池上が可能とした「燃やしたけれど、燃えなかつた」のようなキャンセル文も容認できない。このような話者は、不完全に生じた結果であったとしても結果は結果であると捉え、事象キャンセルを容認しないのだろう。一方、筆者のまわりにも、事象キャンセルを広範に許す日本語話者がいる。話者によっては、宮島が示した例文すべてを容認可能と判断する。このような話者は、結果の微少な不完全さにも敏感に反応し、それを「完全な生起」とは異なる出来事であると見なすのだろう。たとえ語用論の問題だとしても、同じ言語の中でなぜ話者によってこのような大きな違いが出るのかは説明が難しい問題である。

## 5. ビルマ語の事象キャンセルをどのように説明するか

第 3 節でビルマ語と日本語の事象キャンセルの容認度が異なることを指摘し、第 4 節では日本語の事象キャンセルについてビルマ語と対照しながら詳しく考えた。本節では、ビルマ語の事象キャンセルについて考察する。ビルマ語で事象キャンセルが可能になる理由については、意味論的観点による解釈と、語用論的観点による解釈の 2 つがあると筆者は考えている。以下の節では、この 2 つの解釈について論じる。

議論に入る前にビルマ語の事象キャンセルの実例を 4 つ挙げておく。(34)から(36)は Google を用いた検索で見つかったもの、(37)は文学雑誌に載った文学作品からの例である。

- (34) chidau?=nê ?áyápáyâ shâunkàn=bí phwín=dê. mǎ-pwín=bú.  
脚=で 思い切り 蹴りあげる=て あける=RLS NEG-あく=NEG

「ドアを脚で思い切り蹴りあげてあけた(意識:あけようとした)。(しかし)あかなかつた。」(<https://pyomadi.com/article/67560>)

- (35) wei? chá=dè mǎ-cā=bú shò=yìn bǎjàun khē?khé nè=yá=dà=lé.  
 体重 落とす=RLS NEG-落ちる 言う=if なぜ 困難な いる=must=の=か  
 「体重を減らした(意識:減らそうとした)、(しかし)減らないという場合、(その問題が)なぜ困難なのだろうか。」 ([http://www.shwechitthu.com/2019/02/blog-post\\_53.html](http://www.shwechitthu.com/2019/02/blog-post_53.html))
- (36) míǎa?pai?nê lùzù khwé=dè. mǎ-kwé=bú.  
 放水パイプ=で 集団 割る=RLS NEG-割れる=RLS  
 「放水パイプで人々を解散させた(意識:解散させようとした)。(しかし)解散しなかった。」 (<https://www.facebook.com/MARTINSWEMARTIN>)
- (37) cǎnò=gā pyàn=mé=lai?tì.  
 私=SBJ 帰る=尋ねる=きっぱり=RLS
- đôđô ?ǎ̀àn=hà thwe? pò mǎ=là=bà.  
 しかし 声=TOP 出る 現れる NEG=来る=POL  
 「私は尋ねかえした(意識:尋ねかえそうとした)。しかし、声が出てこなかった。」  
 (Myawadi, 1954年3月号: 171頁)

### 5.1. 意味論的観点からの説明

Kato (2018)では、Tsujiura (2003)の日本語の事象キャンセルについての解釈が、実はビルマ語に対して有効だと考えた。この解釈は語彙アスペクトの観点をを用いるので、意味論的な説明である。

Tsujiura (2003)は、日本語の語彙的使役動詞(lexical causative verbs)は限界性(telicity)に関して未指定(underspecified)であると述べ、限界的な解釈(telic interpretation)は会話の推意(conversational implicature)から生じると考える。つまり、Tsujiura は、日本語において限界性が未指定であるからこそ結果のキャンセルが可能だと見なすのである。先述のとおり、多くの日本語話者において達成動詞は不完全ではあっても結果を含意(entail)するから、この説は妥当ではない。この説はむしろ、ビルマ語の事象キャンセルの説明として有効であろうというのが Kato (2018)の主張である。ビルマ語では、(19)から(26)に示したように、様々な動詞でキャンセルが可能である。なおかつ、第4節で示したように結果がまったく生じないという解釈が可能である。ビルマ語の例(6) *nà t̃u=gò ʔa?=tè. dà=bèmê mǎ-t̃è=bú*「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった」の解釈において殺人の相手が無傷であってもよいこと、また、例(19) *mí eò=dè. dà=bèmê mǎ-làun=bú*「(それを)燃やした。しかし、燃えなかった」の解釈において、対象物がまったく燃えていなくてもよいことを思い出していただきたい。実は、これまでに一般言語学において、例えば Singh (1991)や Altshuler (2014)によって検討されてきた不成就達成(non-culminating accomplishment)の多くは、日本語の「結果の不完全な生起」のように、部分的な結果の生起を含むものであるように思われる。しかし、ビルマ語の不成就達成には、結果事象がまったく生じない場合がある。すなわち、Martin (2019, 2020)の言う「ゼロ変化解釈」(zero-change interpretation)がビルマ語では可能なことをここで強調しておきたい。

限界性が未指定であるというのは、(5)の意味表示で考えれば、Resultの部分为实现しても实现しなくてもよいということである。この考え方を採用するなら、例えば、ビルマ語の動詞 *ɿa?*「殺す」が表す意味の中の「死ぬ」を表す結果の部分、語彙アスペクトの中で、实现してもしなくてもよいものとして組み込まれていることになる。ビルマ語文(38)は、後に結果事象を否定する文が続かないものとする。そのことを「///」で表している。ここで発話が終了してもよいし、結果事象を否定する文でなければこの文の後にどのような文が続いてもよい。ビルマ語では、このように達成動詞を述語とする文の直後に結果を否定する節が続かない場合、特殊な文脈でない限り、結果事象は生起したと解釈されるのが普通である。一方で、(39)のように、直後に結果を否定する節が続けば、結果事象は生起しなかったと解釈される。

(38) *ɿà ɿù=gò ɿa?=tè. ///*  
 1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS  
 「僕は彼を殺した。」

(39) *ɿà ɿù=gò ɿa?=tè. dà=bèmê mǎ-tè=bú. =(6)*  
 1SG 3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-死ぬ=NEG  
 「僕は彼を殺した。しかし、死ななかった。」

この、結果事象が生起してもしなくてもよいという両義的な状況を、例えば(40)のように表示することができる。Resultの前の「±」は、Resultの部分为实现してもしなくてもよいことを示す。

(40) Volition → Activity → ±Result

なお、Kato (2018)では、この考え方をさらに推し進め、ビルマ語の達成動詞における結果部分が、語彙の中に目的として存在しているという見方を示した。日本語文「私は魚を買うために、市場に行った」における「私は魚を買う」の部分が表す事象は、「市場に行った」という行為の目的である。目的であるからこそ、「私は魚を買うために、市場に行った」の後に「しかし、魚を買わなかった」と続けることができる。これと同じように、ビルマ語の達成動詞における結果部分を否定することができるのは、この部分が語彙アスペクトにおいて目的の役割を担っているからだと考えたのである。しかし、この考え方は誤りである。なぜなら、もし結果が目的として語彙アスペクトの中に組み込まれているのだとしたら、結果を否定する文が続かない(38)のような文が使われたとき、通常は結果事象が生起したと見なされることの説明がつかない<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> ただし、「彼が死ななかった」という事実を聞き手が知っていると話者が考えているとき、(38)は結果事象が生起していない状況を表すことがある。このような場合、実用語学的にも、

ビルマ語の達成動詞において限界性が未指定であることを支持する現象がある。それは、ビルマ語の動詞連続において、達成動詞が第1動詞(V1)として現れた後に、第2動詞(V2)としてV1の結果事象を表す到達動詞(achievement verb)が現れることがあるということである。(41)では、*ta?*「殺す」の後にその結果事象を表す *te*「死ぬ」が現れており、(42)では、*phán*「捕まえる(意志動詞)」の後にその結果事象を表す到達動詞 *mi*「捕まえる(無意志動詞)」が現れている。このような動詞連続は、達成動詞の限界性が未指定であることによる曖昧性を回避するために使われると解釈できる。

(41) *tù kòkòkò ta? te=dè.*  
 1SG 自分を 殺す 死ぬ=RLS  
 「彼は自殺した。」(直訳: 彼は自分を殺して死んだ。)

(42) *yé=dwè=gâ tǎyǎkhàn=gò phán mi=dè.*  
 警官=PL=SBJ 犯人=OBJ 捕まえる(VOL) 捕まえる(NVOL)=RLS  
 「警察は犯人を捕まえた。」

東南アジア大陸部の諸言語や中国語では、ビルマ語の(41)や(42)のように動詞連続によって結果を明示することが多い。これらの言語の事象キャンセルを語彙アスペクトの観点から意味論的に説明する場合、動詞連続による結果の明示の現象が限界性の未指定という考え方を支持するひとつの根拠となるだろう。

ただし、ビルマ語においては、(41)や(42)のような動詞連続の出現は頻繁ではない。それは、ビルマ語に、動詞連続を構成する動詞の主語項が同一でなければならないという制限があるからである(澤田 1988)。東南アジア大陸部の諸言語では、一般的に、限界性を動詞連続で表す場合、ポー・カレン語の *eán já*(破く / 破れる)「破く」のように、他動詞の目的語項と自動詞の主語項が共有されるような動詞連続が用いられる。このような動詞連続は、ビルマ語においては主語項共有の原則に抵触するので、V1が動作を表しV2が結果を表す(41)と(42)のような動詞連続の出現は稀である。(41)は、V1の *ta?*「殺す」の動作対象が主語の指示対象である「彼」自身であるため、V2の *te*「死ぬ」の主語項とV1の主語項がたまたま同一になり、上記の原則に抵触しない。また、(42)は、V2の *mi*「捕まえる」が無意志動詞でありながら、捕獲者を主語に取り捕獲対象を目的語に取る他動詞なので、やはり上記制限に抵触しない(ビルマ語では無意志動詞の大部分は自動詞である)。

---

結果が生じたか否かについて細心の注意が必要になる。これについて岡野(2014: 18-19)の興味深いエピソードを引いておく。岡野は、入国管理局でビルマ語通訳をしていたとき、あるミャンマー人男性が、(軍人が自分を)銃剣で刺したと日本語に直訳できるようなビルマ語を発したため、最初はそのとおりに訳したが、実際には銃剣が刺さった状況には至らなかったことを知り、係官に実際の状況の詳細を追加説明したという。



## 5.2. 語用論的観点からの説明

ビルマ語の事象キャンセルを、前節のように動詞の語彙アスペクトの観点から、すなわち意味論的な観点から説明することには、複雑な語用論的規則を持ち込まずに説明できるという利点がある。しかし、問題もある。それは、ビルマ語の達成動詞が限界性に関して本当に未指定であるならば、動詞の意味に含まれる結果の部分が生じたか否かはどのように決定されるのかを説明しなければならないという課題が残ることである。

5.1 で述べたように、(38)のような達成動詞を述語とする文が発話されたとき、その直後に結果を否定する節が続かなければ、結果事象は生起したと解釈されるのが普通である。もし本当に動詞の意味の中に限界性が指定されていないのだったら、このような解釈が起こるだろうか。なぜ直後に達成動詞の結果部分を否定しなければ、結果事象は生起したと解釈されるのか。この問いに答えなければならない。そこで頭をもたげるのが、ビルマ語の事象キャンセルは動詞に内在する意味の問題ではなく、実際のところは語用論の問題だという可能性である。

岡野賢二(p.c., 2021年9月19日)の指摘によると、例えば(19)から(26)のような2文からなる事象キャンセルは、名詞化辞の =tá で2つの文をつないで1つの文にしたほうが話し言葉として自然だという。名詞化辞の =tá には、「～したところ」や「～したのだが」のように訳すことのできる副詞節を作る働きがある。(20)を再掲した(43)は動詞文述語の終わりを示す =tè で前件文を完全に独立した文の形にしてある。一方、(44)は副詞節を作る =tá を用いて、(43)の2文を1つの文にしてある。

(43) t̃u=gò t̃aʔ=tè. dà=bèmê mǎ-t̃è=bú. =(20)  
3SG=OBJ 殺す=RLS しかし NEG-死ぬ=NEG  
「彼を殺した。しかし、死ななかった。」

(44) t̃u=gò t̃aʔ=tá mǎ-t̃è=bú.  
3SG=OBJ 殺す=NMLZ(RLS) NEG-死ぬ=NEG  
「彼を殺したところ、死ななかった。」

この2つを比較すると、(43)も間違いではないが、(44)のほうが自然である。あるいは、(43)から dà=bèmê 「しかし」を省いた(45)のほうが(43)よりも自然である。実際、(34)から(36)に示した実例においても、(45)と同様に、 dà=bèmê 「しかし」が使われていない。

(45) t̃u=gò t̃aʔ=tè. mǎ-t̃è=bú.  
3SG=OBJ 殺す=RLS NEG-死ぬ=NEG  
「彼を殺した。死ななかった。」

例(44)(45)が(43)と違うところは、達成動詞を含む述語と否定節が、dà=bèmê 「しかし」がない分、近くにあるということである。一方で、既に述べたとおり、結果部分を否定する節が直後に続かない場合は、通常、結果事象は生起したことになる。つまり、結果をキャンセル

したい場合、結果部分を否定する節は達成動詞を含む述語とできるだけ近い場所にあったほうがよいことになる。

このことから予想されるのは、ビルマ語の事象キャンセルは、 $A \dots m\ddot{a}-B=b\acute{u}$  と表示できるような一種の連語(collocation)に働く推意であるという可能性である。具体的には、(46)に示すような推意である。

(46) 次のような形式があったとき、

$A \dots m\ddot{a}-B=b\acute{u}$

(ただし、 $A$  と  $B$  は動詞。...の部分に入るのは可能な限り少数の形態素。)

$A$  が達成動詞であり、かつ  $B$  がその結果部分を表す到達動詞であるならば、次のような推意が働く：「 $A$  が表す事象は動作部分のみが成立し、結果部分が成立しない」。

このように考えると、否定節が達成動詞のなるべく近くにあるほうがよいことが説明できる。連語を解釈するには間に夾雑物が入らないほうがよいからである(したがって、「...」の部分には可能ならば文境界が入らないほうがよい)。また、事象キャンセルがこのような語用論的現象であると考えれば、基本的には達成動詞の結果部分は成立するものとして語彙アスペクトの中に組み込まれていると見なしてよいから、(38)のように否定節が続かない場合には結果事象が生起したと見なされることも説明できる。なお、 $m\ddot{a}-B=b\acute{u}$  の場所には、これ以外にも結果を否定するような表現、例えば  $A=l\acute{o} m\ddot{a}-y\acute{a}=b\acute{u}$  「 $A$  することができない」のような表現も現れ得る。

ただし、もしビルマ語の事象キャンセルをこのような語用論的現象と見なすならば、(41)と(42)のような、動詞連続によってわざわざ結果を表す現象がなぜ存在するのかを説明するのが難しくなる。V1 に結果部分が成立するものとして含まれているのだから、V2 で結果をもう一度言うことはトートロジーになってしまうからである。これが語用論的説明の問題点である。

### 5.3. 第5節のまとめ

ビルマ語で事象キャンセルが可能になる理由について、5.1 では意味論的観点から、5.2 では語用論的観点から論じた。この2つが、現在、筆者が有力視している解釈である。ただし、どちらの解釈にも短所がある。語彙アスペクトにおける限界性の未指定という意味論的な観点から説明しようとする、なぜ、達成動詞を述語とする文が発話されたとき、(38)のようにその直後に結果を否定する節が続かなければ、結果事象は生起したと解釈されるのかという問題が生じる。一方で、語彙アスペクトには限界性が指定されているという前提に立って語用論的な観点から説明しようとする、なぜ、(41)と(42)のような、動詞連続によってわざわざ結果を表す現象が存在するのかという問題が生じる。

意味論的解釈と語用論的解釈それぞれの短所は、対立する解釈にとっての長所になると

いう裏腹の関係にある。どちらの解釈がより適切なのか、筆者はまだ明確な答えを出せないでいる。しかし、直感的には、ビルマ語の事象キャンセルも、日本語と同じように、語用論的観点から説明するのがよいのではないかという予測を持っている。というのは、5.2 で論じたように、なるべく近い位置で達成動詞の結果を否定したほうがキャンセルが自然になるという事実は、事象キャンセルが発話の状況に依存した現象であることを物語るからである。筆者は、ビルマ語以外の東南アジア大陸部諸言語についても、全般的に、事象キャンセルを可能とする要因は語用論にあるのではないかという印象を持っている。例えば、Thepkanjana and Uehara (2009)によると、タイ語では、*tamrùat khâa phûuráay mây taay* (警察 / 殺す / 悪漢 / NEG / 死ぬ)「直訳: 警察は悪漢を殺したが死ななかつた」のように動詞連続の中で結果のキャンセルを行うことは可能であるが、\**sômchaay khâa maleeŋ. tèt maleeŋ mây taay* (Somchaay / 殺す / 虫 / しかし / 虫 / NEG / 死ぬ)「直訳: ソムチャイは虫を殺した。しかし、虫は死ななかつた」のように節をまたいだキャンセルは容認されなくなるという。これも、タイ語に(46)と同様の、近い位置での否定にはこの否定を成立させるような推意が働くという語用論的な背景が存在しているためなのではないかと思う。さらに、峰岸(本巻所収)の報告によれば、Thepkanjana and Uehara (2009)がアステリスクをつけた上記のような例における前件文も、目的語を明示しなければ事象キャンセルが容認される可能性が高くなるという。このような状況は、事象キャンセルを可能にする要因が意味論ではなく語用論にあることを物語る。以上が第5節のまとめである。

#### 5.4. 付記

ここでは、5.2 の語用論的解釈の問題点、つまり、達成動詞の意味に結果事象が含まれているのだとしたらなぜ動詞連続を使って結果を再び言うことがあるのかという問題点の説明として、ひとつの可能性を示す。それは、ビルマ語においては、達成動詞の結果部分は成立するものとして語彙アスペクトの中に組み込まれてはいるものの、これら達成動詞の実際の使用においては、結果部分が非焦点化されているということである。

ビルマ語には次のような表現がある。結果を表す動詞に助詞 *=ʔàun*「(～する)ように」を後置して従属節を作り、主節には、その結果を意味的に含む達成動詞を置く、非常によく使われる表現である。(47)から(51)に例を示す。

- (47) *tèt=ʔàun*            *ʔaʔ=tèt.*  
 死ぬ=ように      殺す=RLS  
 「努力して殺した。」(直訳: 死ぬように殺した。)

- (48) *mî=ʔàun*            *phán=dèt.*  
 とらえる(NVOL)=ように      とらえる(VOL)=RLS  
 「努力して捕まえた。」(直訳: 捕まるように捕まえた。)

(49) c<sup>ó</sup>=ʔàun      ch<sup>ó</sup>=dè.  
折れる=ように      折る=RLS  
「努力して折った。」(直訳: 折れるように折った。)

(50) pw<sup>ín</sup>=ʔàun      phw<sup>ín</sup>=dè.  
あく=ように      あける=RLS  
「努力してあけた。」(直訳: あくようにあけた。)

(51) pyeʔ=ʔàun      phy<sup>e</sup>ʔ=tè.  
壊れる=ように      壊す=RLS  
「努力して壊した。」(直訳: 壊れるように壊した。)

これらは、文脈に応じて「努力して～する」「きちんと～する」「注意して～する」「確実に～する」のように訳することができる。=ʔàunを用いたこの表現は論理的に奇妙に感じられる。なぜなら、例えば(47)を見ると、**taʔ**「殺す」という動詞がそもそも対象物に死をもたらすように遂行される動作を表すのだから、**tè=ʔàun**「死ぬように」の部分は不要であるように思えるからである。(48)から(51)も同様である。

この事例から考えられることは、ビルマ語においては **taʔ**「殺す」のような達成動詞の結果部分が相対的に目立たなくなっている、すなわち非焦点化されている(defocused)ということである。結果部分が目立たないことを、(52)のように表示してみよう。結果(Result)の部分を括弧内に入れたのは、この部分が目立たないことを表す。

(52) Volition → Activity → (Result)

達成動詞の結果が非焦点化されているという仮説を取り入れることによって、(41)と(42)の動詞連続で到達動詞を用いることの説明がつく。すなわち、達成動詞の結果部分は目立たないから、到達動詞で明示するということである。このような動詞連続は意味論的にはトートロジーになるが、自然言語においては意味の明示や修辞法的な効果のためにトートロジーが使われることはよくあることであるから、このような現象があっても奇妙ではない。

既に述べたように、ビルマ語は意志動詞と無意志動詞の区別が明確な言語である。例えば無意志動詞 **tè**「死ぬ」は意志的に死ぬことを表すことができないし、逆に意志動詞 **taʔ**「殺す」は無意志的に殺すことを表すことができない<sup>9</sup>。このような言語では、結果事象を表すのは主に無意志動詞の役割になる(ビルマ語における達成動詞は意志動詞であり、到達動詞は無意志動詞である)。そのため、対する達成動詞においては、視点が動作のほうに向かい、

<sup>9</sup> 東南アジア大陸部の諸言語は全般的にこのような特徴を持つ。例えばクメール語について峰岸(1986: 48)は、「要するに、クメール語においては、人間、動物といった「有生」「有情」の存在が、その能力を用いて意図的に企てられる「する」的行為と、彼らの力の及ばない「なる」の状況とが明確に区別され、各々別種の動詞で表現されるのである」と述べている。

結果部分は目立たなくなるという効果が恒常的に働いているのではないか。これはあくまで語用論的効果であるから、達成動詞における結果事象は、後にそれを否定する表現が続かなければ成立したと見なされる。したがって、結果事象は、動詞の語彙アスペクトの中で意味論的に弱い部分として組み込まれているというわけではない。(52)で結果事象を括弧にくくったのは、あくまで語用論的な効果を図示したものである。参考として、(19)から(26)の例に用いた動詞を見ると、達成動詞 *eô* 「燃やす」、*ta?* 「殺す」、*châ* 「落とす」、*chó* 「折る」、*hlé* 「倒す」、*phwîn* 「あける」、*phyε?* 「壊す」、*ka?* 「くっつける」は意志動詞であり、到達動詞 *läun* 「燃える」、*tè* 「死ぬ」、*câ* 「落ちる」、*có* 「折れる」、*lé* 「倒れる」、*pwîn* 「あく」、*pyε?* 「壊れる」、*ka?* 「くつつく」(*ka?* 「くっつける」と同音異義)は無意志動詞である。RRG の意味表示を用いるならば、*eô* 「燃やす」のような意志動詞には動作主性を表す DO が語彙レベルで組み込まれており、*läun* 「燃える」のような無意志動詞には DO が語彙レベルでは組み込まれていないということになる。

5.1 で述べたように、(41)と(42)のような、結果を明示する動詞連続は、東南アジア大陸部諸言語や中国語で頻繁に見られる。このような動詞連続が存在する原因は、ビルマ語以外の言語においても、達成動詞の結果事象が非焦点化されていることにある可能性がある。

さらに、もし(46)のような推意がビルマ語に存在しているのだとしたら、それは、達成動詞の結果事象が非焦点化されていることと関係している可能性が高い。第4節で、日本語の事象キャンセルの成立要因として結果の非焦点化が副次的な要因として関わっていることを見た(日本語の事象キャンセルの成立要因(ii))。これと同じように、達成動詞の意味における結果部分が語用論的に目立たなくなっているのであれば、その後それを否定する表現を置いても許容される余地が生まれるだろう。(46)のような推意が実際にあるのだとしたら、その推意を可能にする原因は結果事象の非焦点化とおそらく関係があるはずである。

達成動詞の結果が目立たなくなる現象は、第4節で述べたように日本語でも見られるものである。そして興味深いことに、(41)と(42)のようなトートロジー的な表現は、動詞連続という形ではないが、日本語にも観察される。先述の杉岡洋子(p.c.)によると、数年前に、日本のアニメーションの台詞を英語に訳した字幕が、SNS を通して英語話者の間で話題になったという。それは次の英語文である。

(53) People die if they are killed. 「人は殺されれば死ぬ」

これは、『Fate』というアニメーション・シリーズで使われた台詞だという。主人公が言った「人は殺されれば死ぬ」という日本語を英語に直訳したものである。日本語では、この後に「それが当たり前なんだ」という台詞が続く。日本語話者であれば、「人は殺されれば死ぬ」に多少の違和感はある、主人公が何度も瀕死の重傷を負いながら生き長らえてきたストーリーを知れば、すんなりと許容できる者も多いことと思う。ところが、英語話者の間でこの台詞が話題になり、「こんな表現が日本語では可能なのか」という疑問が多く投げかけられ

たのだという。それは、英語話者にはこの文がトートロジーであると感じられるためらしい。この問題の原因は、日本語においては達成動詞の意味に内在する結果部分が目立たなくなつたときに、その結果部分を表す到達動詞を後で用いても違和感を生じないことがある、ということにあるのではないか。このアニメにおける主人公は、何度も殺害を目的とした攻撃を受けている。そのために動詞「殺す」の動作部分が目立つと同時に結果事象の部分が非焦点化され、「人は殺されれば死ぬ」という日本語が成立しているのではないか。一方、英語においては動詞 kill の意味に内在する「死ぬ」という結果部分は常に目立つものなので、「死ぬ」という事象を表す die が同一文中に存在できないのだろう。つまり、(53)の台詞をめぐる「騒動」は、日本語と英語の達成動詞における結果部分の「目立ち具合」の違いに起因するのではないかと思われる。さらに、ビルマ語では、動詞 *ta?*「殺す」の結果事象の部分は目立ち具合が常に低いようであり、「人は殺されれば死ぬ」を訳した下の(54)はビルマ語の文としてまったく問題なく容認される。

- (54) *lù=hà ?ă-ta? khàn=yâ=yin t̃è=mè.*  
 人=TOP A-殺す 受ける=INEV=if 死ぬ=IRR  
 「人は殺されれば死ぬ。」

池上(1981)は、英語に「<動作主>指向的」な傾向があり、日本語には「<出来事全体>把握的」な傾向があるとした。そして、英語のような言語を「<する>的な言語」(DO-language)、日本語のような言語を「<なる>的な言語」(BECOME-language)と呼んだ。池上は、「<なる>的な言語」である日本語は「到達点指向性」が弱く(p. 269)、「もともとから自動詞的な運動の動詞はもちろんのこと、他者へ向けられた行為を表わす動詞まで、言わば「自動詞」化する傾向があるのである」(p. 270)と述べる。上で述べた結果の非焦点化は、池上がここで自動詞化と言っている現象に含まれるだろう。

## 6. 調査票について

ここでは本巻所収の「事象キャンセル調査票」について述べる。私達の慶應義塾大学東南アジア諸言語研究会では、2018年に東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルについて検討を始めた。検討開始後、同一の調査票を使って言語横断的に調べれば東南アジア大陸部諸言語における事象キャンセルの実態が捉えやすくなるという予測に基づき、調査票を作成することになった。そこで、加藤が原案を作って参加者全員で議論をし、修正を加えるというやり方で調査票を作成した。この調査票は次のような14種類の質問項目群からなる。

- Q1. 対象物の物理的变化が否定され得るか
- Q2. 対象物の知覚が否定され得るか
- Q3. 対象物の移動が否定され得るか
- Q4. 対象物との接触が否定され得るか

- Q5. 目的地への到達が否定され得るか
- Q6. 作成物の出現が否定され得るか
- Q7. 対象物の獲得が否定され得るか
- Q8. 発声が否定され得るか
- Q9. 飲食物の摂取が否定され得るか
- Q10. 自己完結的動作の最終状態が否定され得るか
- Q11. 自己完結的動作そのものの開始が否定され得るか
- Q12. 被使役者の動作や感情の実現が否定され得るか
- Q13. 動詞連続。「V1 V2 した。しかし、V2 しなかった」が可能か
- Q14. 受身

このうち、Q1 から Q12 までは、第 2 節で(a)から(l)に示した事象キャンセルのリストにそのままの順番で対応する。Q13 と Q14 は補足のような質問項目群であり、今後、東南アジア諸言語の文法現象を考える上で参考になることもあったと考え、筆者の判断で加えたものである。Q13 は、動詞連続の V1 と V2 のうち V2 を否定することができるか否かを調べる項目群であり、Q14 は、もし調査対象言語に受身(=受動態)に類する表現があれば、そこで使われる動詞の結果部分を否定することができるかどうかを調べる項目群である。東南アジアにはポー・カレン語のように受動態のない言語も多い。したがって、Q14 はすべての言語に該当するとは限らない。Q13 と Q14 は補足のような項目群なので、質問項目数も少なく、Q13 は 2 項目、Q14 は 1 項目のみからなる。

各質問項目は日本語で例えば、「1-1. X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかった。」とある。これを各言語に訳したときに、それをコンサルタントがどのように判断するかを調べた。丸括弧に入れた「X さんは」の部分は訳出してもしなくてもよい。各質問項目について注意すべきことがあれば、【注】の後に記載した。

すべての質問項目の日本語は、「しかし」でつながれた 2 文からなる。この 2 文は、同一話者が連続して発話したものと想定する。各質問項目を、「X さんを殺したが、(X さんは)死ななかった。」あるいは「X さんを殺しても、(X さんは)死ななかった。」というような 1 文にしなかったのは、最初の文の陳述が終了していてもキャンセルができるのであれば、それだけ事象キャンセルが確固とした現象であることが示せると考えたからである。しかし、各言語の調査者が 1 文のみの用例を採取する必要があるれば、そうしてもよいとした。調査対象とした言語の中には、たとえばポー・カレン語のように、1 文であるか 2 文であるかの判断が難しい言語もあるからである。

各質問項目の前件文の述語は、「殺した」のように動詞単独からなる。日本語の場合、この動詞に「(～し)ようとした」を付けると容認可能な文連続になることが多い。例えば、日本語では通常、「太郎を殺した。しかし、死ななかった」は容認不可能な文連続であるが、「太郎を殺そうとした。しかし、死ななかった」は容認される。他にも、ポー・カレン語で

は、前件文の動詞の後に jōwá「(～し)てみる」を置くと、容認されなかった文連続が可能になる。これは、日本語の「(～し)ようとした」やポー・カレン語の jōwá のような形式が、動作の開始そのものを「含意されないもの」とする機能を持つからだと考えられる。したがって、こうした形式を用いた文でキャンセルが可能であったとしても、それは純然たる事象キャンセルではない。動詞連続に関する Q13 を除き、調査票における日本語の前件文の述語を動詞単独(使役と受動を表す接辞は動詞内部の要素と見なす)にしたのは、このような夾雑物を排除するためである。

## 7. 東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル

本研究会では、本巻所収の「事象キャンセル調査票」に基づいて参加者がそれぞれ担当する言語を調べ、もし必要があれば個人の判断で追加事項を調べた。調査対象とした言語は、ベトナム語 Vietnamese(春日淳、清水政明)、クメール語 Khmer(上田広美)、ラオ語 Lao(鈴木玲子)、タイ語 Thai(峰岸真琴)、ポー・カレン語 Pwo Karen(加藤昌彦)、ロンウオー語 Lhaovo(澤田英夫)、ビルマ語 Burmese(岡野賢二)、の7言語である(括弧内は担当者)。ベトナム語とクメール語はモン・クメール系、ラオ語とタイ語はタイ・カダイ系、ポー・カレン語とロンウオー語とビルマ語はチベット・ビルマ系である。本巻には各担当者が執筆した各言語についての報告論文を収める。このうちベトナム語については、参加者2人が異なるコンサルタントを被調査者として別個の報告論文を書くことにした。なぜなら、研究を進めるうちに、同じ言語でもコンサルタントによって事象キャンセルについての容認度が異なることが分かってきたからである。コンサルタントが異なることによって報告論文の内容が異なることがあれば、そこにも何らかの学問的意義を見出せると判断した。したがって、本巻で扱った言語数は7言語であるが、報告論文の数は8篇である。報告論文の執筆にあたっては、第5節で論じたような意味論であるか語用論であるかといった解釈上の問題よりも、対象言語において各々の事象キャンセルが可能であるか否かの記述に重きを置くこととした。

表3は各担当者による報告論文の記述に基づいて各言語の事象キャンセル可能性を対照したものである。先頭行は言語名である。Pwo K. はポー・カレン語を表し、Viet 1 は春日淳の調査によるベトナム語、Viet 2 は清水政明の調査によるベトナム語を表す。概ね、左から右に向かって言語の分布域が西から東へ向かうよう配置した。左端の列は質問項目番号とその質問項目の前件文に用いた動詞を示している。Q1 から Q12 の質問項目群のうち各項目群を代表するような質問項目を選んだ。Q13 と Q14 は補足的な項目群であるため省いた。

「○」は質問項目の日本語をその言語に直訳した事象キャンセルが完全に容認可能なことを表し、「×」は完全に容認不可能なことを表す。「?」はそのどちらでもないことを表す。2人以上のコンサルタントの判断を仰いだケースでは、いずれかの母語話者が容認可能と判断したとしても別の母語話者がそのように判断しなかった場合には、「?」とした。

この表の「○」の多さから、東南アジア大陸部諸言語では、細部の違いこそあれ、事象キャ



ンセルが広く容認されることが分かる。

ただし、「○」がついていても言語によっては事象キャンセルによって表される状況が異なる場合があることにも留意する必要がある。調査票の 7-1 「その本を買った。しかし、買えなかった。」を例に取ろう。ポー・カレン語の *ja xwè láí?ào nó. lánânθí nī ʔé* (1SG / 買う / 本 / その / しかし / 得る / NEG) 「私はその本を買った。しかし、得られなかった」(加藤 [本巻所収]参照)は、「本を買おうとして本屋に行ったが、目的の本がなく、入手することができなかった」という調査票が意図したとおりの状況を表す。すなわち、商品そのものが存在せず、したがって支払いもしていない。一方、タイ語の *súuu léew. tée yan mâu dáy* (買う / 完結 / しかし / まだ / NEG / 得る) 「買った。しかし、まだ得ていない」(峰岸 [本巻所収]参照。表記は本章筆者が変更)は、「代金を払ったが、まだ商品が手元に届いていない」という状況を表す。すなわち、商品は存在し、支払いも済ませており、商品の入手だけが終わっていない。個々の言語のこのような違いには十分に注意する必要がある。

また、同じベトナム語であっても、春日(本巻所収)のコンサルタントと清水(本巻所収)のコンサルタントは、事象キャンセルの可否において異なる判断を示している。つまり、判断が話者によって異なるということであり、このことは、事象キャンセルの容認度の判定に慎重さが必要なことを物語っている。

表 3: Q1 から Q12 のうち代表的な質問項目を選択し、それら事象キャンセルの各言語における容認可能性を示した。

	Burmese	Lhaovo	Pwo K.	Thai	Lao	Khmer	Viet 1	Viet 2
1-1 殺す	○	○	○	○	○	○	○	○
1-12 燃やす	○	○	○	○	○	○	○	○
2-1 見る	○	○	○	○	○	○	○	○
3-1 投げる	○	○	○	○	○	×	○	○
4-1 叩く	?	×	○	○	○	○	○	○
5-1 行く	○	○	○	○	○	○	○	×
5-2 来る	○	○	○	○	×	○	×	×
6-1 作る	○	○	○	○	○	○	○	○
7-1 買う	○	×	○	○	×	×	×	×
8-1 話す	○	○	○	○	○	○	○	○
9-1 食べる	?	○	○	○	○	○	○	○
10-1 立つ	○	○	○	○	○	○	○	×
11-1 立つ	○	○	×	×	×	○	○	×
12-1 踊らせる	○	○	○	○	○	○	○	○
12-6 与える	○	○	○	○	○	○	○	○

各言語の事象キャンセルの詳細については、各報告論文を見ていただくとして、ここでは、東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセルの全体を俯瞰したときに一般化できることを 2 点指摘しておきたい。

1 つは、調査票 Q1 の「対象物の物理的変化」のキャンセルはどの言語でも可能なことが多いということである。Q1 は典型的な使役的達成動詞(causative accomplishment verb)におけるキャンセルである。さらに、いずれの言語においても「殺す」を表す動詞の結果部分がキャンセル可能なことから、これらの言語では Martin (2019, 2020)の言うゼロ変化解釈(zero-change interpretation)が可能だと見てよく、これはゼロ変化解釈を許さない日本語との大きな違いである。なお、Martin (2019)は、ゼロ変化解釈のような不成就達成(non-culminating accomplishment)を可能にする原因の 1 つとして、その言語の完結相演算子(perfective operator)が「弱い完結相」(weak perfective)の特徴を有することを挙げる。しかし、東南アジア大陸部諸言語ではいわゆる完結相標識が現れない場合にも不成就達成が可能であるため、この事実をどのように解釈すべきかという問題が残る。例えばポー・カレン語においては、jə dwé θéinthàin. lānānθí mí ʔán ʔé (1SG / 燃やす / 木の枝 / しかし / 火 / 食う / NEG)「私は木の枝を燃やした。しかし、燃えなかった」(加藤[本巻所収]参照)の例のように、無標の動詞述語において不成就達成の解釈が可能である。Sato (2021)は、Martin の解釈に沿ったインドネシア語の不成就達成の分析において、無標の動詞(unmarked/bare verbs)が完結相(perfective aspect)を表していると思なしている。これは理論言語学における一個の解釈として合理性を持つとは思われるが、記述言語学的に見たときに、インドネシア語の無標の動詞が完結相を表すと考えることの妥当性には検討の余地がある。

もう 1 つは、使役構文における被使役動作のキャンセルがどの言語でも可能なことが多いということである。これは調査票 Q12-1 の調査結果に現れている。ここでは使役構文を「使役を表す要素と被使役行為を表す要素が別個の形態素で表される構造」と定義しておく。一例として Q12-1 を使って得られたポー・カレン語の例を右に挙げよう。jə dà tháunlí ʔə. lānānθí ʔəwé tháunlí ʔé (1SG / CAUS / 踊る / 3SG / しかし / 3SG / 踊る / NEG)「私は彼を踊らせた。しかし、彼は踊らなかった」(加藤[本巻所収]参照)。ここでは、使役を表す助詞 dà が「使役を表す要素」であり、「踊る」の意を表す動詞 tháunlí が「被使役行為を表す要素」である。

「対象物の物理的変化」および「使役構文における被使役動作」のキャンセルが容易であるのは、(5)に示した図式における動作(activity)と結果(result)の切り分けが容易であることに起因するのだろう。例えば、調査項目の 1-1「X さんを殺した。しかし、(X さんは)死ななかつた。」が想定する状況において、動作部分は動作者(actor)において遂行されるが、結果部分は被動作者(undergoer)において生じる。同様に、使役構文においても、使役行為は使役者(causer)において遂行されるが、被使役行為は被使役者(causee)において遂行される。これらの事象に登場する存在物(entity)は最低でも 2 つあり、しかもそれぞれの存在物に対して各 1 個の下位事象を認識することが容易である。このように、複数の存在物のそれぞれに別個の

下位事象の生起を認識することが容易な場合には、動作と結果を切り分けることが容易だろう。一方で動作と結果を切り分けることが容易でない場合がある。調査項目の 4-1「X さんを叩いた。しかし、叩けなかった。(【注】叩こうとしたが、手が届かなかったという状況)」が想定する状況において、登場する存在物には動作者と被動作者の 2 つが存在するものの、被動作者の側には変化が生じないため被動作者の側に別個の事象を認識することは難しい。さらに、調査項目の 10-1「立った。しかし、立てなかった。(【注】椅子から立ち上がろうとして途中まで腰を上げたが、直立の姿勢にはならなかったという状況)」が想定する状況において、登場する存在物は「立つ」という動作を行う動作者のみである。「立つ」という動作そのものも、連続した動きからなるのであり、そこに複数の事象を認識することは難しい。このように、複数の下位事象を認識することが難しかったり、存在物が 1 個しかない事象の場合には、動作と結果を切り分けることが容易ではないだろう。要するに、本章で「達成」と見なした事象の中には、動作と結果を切り分けることが容易な事象からそうでない事象まで、様々なものが存在している。事象キャンセルの観点に立てば、動作と結果の切り分けが容易な場合には結果のキャンセルがしやすく、逆に、切り分けが容易でない場合には結果のキャンセルがしにくいと考えられる。そして、動作と結果の切り分けができるか否かという判断は、言語によってあるいは話者によって異なるのだと思われる。表 3 において、Q1 と Q12 以外の多くの項目における事象キャンセルの可否が言語によってあるいは話者によって様々であるのは、このような理由によるのだろう。

ところで、筆者は、研究会参加者の各報告を聞き、ミャンマーで話される言語であるビルマ語、ロンウオー語、ポー・カレン語の 3 つは、文境界をまたぐ(すなわち、2 文からなる)事象キャンセル例の誘出(elicitation)が他の言語に比べて容易との印象を持った。筆者はこの印象に基づいて、ミャンマーの言語と他の国々の言語のこうした違いは、文境界をまたいだ事象キャンセルが連語的な表現として確立している度合いが言語によって異なることを反映していると推測している。すなわち、ミャンマーの言語では、2 文を使って結果をキャンセルする言い方が他の国の言語よりも高い度合いで連語的な表現として確立している可能性があるということである。加えて、そのような表現の確立の度合いは言語接触によって伝播すると推測している。ビルマ語とロンウオー語、あるいはビルマ語とポー・カレン語は、日常的に極めて濃密に接触しているからである。一方で、ベトナム語、クメール語、ラオ語、タイ語といった言語では、文境界をまたがずに動詞連続の中で結果を否定する現象のほうが一般的なため、2 文を使った事象キャンセルがミャンマーの言語ほどは連語的な表現として確立していないと推測している。ただ、これらの推測には検証が必要である。

## 8. まとめ

以上、事象キャンセルについて様々なことを議論してきた。第 1 節から第 7 節までに見てきたことを振り返ってみよう。

第 1 節では、「事象キャンセル」という用語に問題があることを認めた上で、「事象が既に

成立したことを表す発話の内容を話者がその後で撤回(=キャンセルする)という言い方を縮約したものとして「事象キャンセル」という用語を用いることを述べた。

第2節では、事象キャンセルで何が否定されるかについて論じ、事象キャンセルによって否定されるのは、意志的な動作に続く結果の部分であることを述べた。

第3節では、事象キャンセルが可能とされている言語においても、事象キャンセルの容認度に大きな違いが見られることを指摘した。具体的には、日本語とビルマ語とを比較し、事象キャンセルの容認度が大きく異なることを見た。

第4節では日本語の事象キャンセルの特徴について、先行研究を批判しながら一般化することを試みた。Kato (2018)に基づき、日本語では、結果が部分的にのみ起きたという推意が働くことによって事象キャンセルが可能になるのであり、そのため「結果の不完全な生起」の解釈がしやすい事象の場合にキャンセルが可能になりやすいことを指摘した。また、日本語では、「結果の非焦点化」も事象キャンセルを可能とする副次的な要因として働いていることを指摘した。さらに本節では、日本語とビルマ語の事象キャンセルの重要な意味上の違いについても詳述した。日本語の事象キャンセルでは「結果の不完全な生起」という形で結果事象が起きている。一方、ビルマ語の事象キャンセルは、結果事象がまったく起きていない読み、すなわち Martin (2019, 2020)の言うゼロ変化解釈(zero-change interpretation)が可能という点で、日本語と大きく異なる。

第5節では、東南アジア諸言語の一例として、ビルマ語を取り上げ、やはりその事象キャンセルについての一般化を、意味論的な観点と語用論的な観点から試みた。意味論的な観点からは、Tsumimura (2003)の日本語の事象キャンセルに関する一般化である「日本語の語彙的使役動詞が限界性に関して未指定」という説が、日本語ではなくビルマ語に当てはまる可能性を論じた。ただし、この説を取ると、動詞の意味に含まれる結果部分が生じたか否かはどのように決定されるのかという問題が残る。語用論的な観点からは、ビルマ語に A... mā-B=bú という形式があったとき、A が達成動詞であり B がその結果部分を表す到達動詞であるならば、この形式に「A の結果部分が成立しない」という語用論的推意が働く可能性を論じた。この説では、達成動詞の結果事象は成立するものとして語彙アスペクトの中に組み込まれていると考える。ただし、そうだとしたら、達成動詞と到達動詞からなるトートロジー的な動詞連続が許容されることの説明が困難になってしまう。このような議論を行った上で、ビルマ語の事象キャンセルについての一般化として意味論的な説明と語用論的な説明のどちらが良いかはまだ明確に決定できないが、筆者は語用論的な説明のほうがより適切であるとの印象を持っていると述べた。さらに、付記として、ビルマ語においては、達成動詞の表す結果事象が語用論的に非焦点化された(=目立たない)存在になっている可能性を指摘し、そのためにトートロジー的な動詞連続が存在する可能性を指摘した。トートロジーは論理矛盾を生じないから、存在しても構わないのである。ここではまた、達成動詞に含まれる結果事象が非焦点化されているという特徴が他の東南アジア大陸部諸言語においても共通している可能性を示唆した。

第6節では本巻所収の「事象キャンセル調査票」について説明した。

第7節では、ベトナム語、クメール語、ラオ語、タイ語、ポー・カレン語、ロンウォー語、ビルマ語を対象として行った本研究会の調査で明らかになったことを述べた。まず、東南アジア大陸部諸言語においては、全般的に見て、事象キャンセルが容認されることが多いことを指摘した。さらに、どの言語でも対象物の物理的変化と使役構文における被使役動作のキャンセルが可能な場合が多いという一般化を行った。また、これらの東南アジア大陸部諸言語では達成動詞のゼロ変化解釈(zero-change interpretation)が可能であることを指摘した。

## 略号

1	一人称	NMLZ	名詞化辞(nominalizer)
2	二人称	NVOL	無意志的(non-volitional)
3	三人称	OBJ	目的語(object)
A	ビルマ語の名詞化接頭辞 ?ä-	PL	複数(plural)
ABL	奪格(ablative)	POL	丁寧(politeness)
ACM	副詞節標識(adverbial clause marker)	RLS	現実法(realis)
CAUS	使役(causative)	SG	単数(singular)
FUT	未来(future)	SBJ	主語(subject)
INEV	不可抗力性(inevitability)	TOP	主題(topic)
IRR	非現実法(irrealis)	VOL	意志的(volitional)
NEG	否定(negation)		

## 参考文献

- Altshuler, Daniel (2014) A typology of partitive aspectual operators. *Natural Language & Linguistic Theory* 32: 735–75.  
<https://doi.org/10.1007/s11049-014-9232-1>
- 青木奈律乃・中谷健太郎(2013)「事象キャンセル可能性についての質問紙調査——その詳細データ——」『甲南大学紀要 文学編』163: 41–57.
- Aoki, Natsuno and Kentaro Nakatani (2013) Process, telicity, and event cancellability in Japanese: a questionnaire study. *Papers from the Thirtieth Conference November 10-11, 2012 and from the Fifth International Spring Forum April 21-22, 2012 of the English Linguistic Society of Japan*, 257–263.
- Chae, Seong-Sik (2002) Event cancellation phenomena in Japanese: With special reference to fake result-cancel constructions. *Tsukuba English Studies* 21: 139–140.
- Dell, Francois (1983) An aspectual distinction in Tagalog. *Oceanic Linguistics* 22(1/2): 175–206.
- Dowty, David (1979) *Word meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- 江連和章(2006)「燃やしても燃えなかった」：事象無効化に関する日英語対照研究『神奈

- 川島立外語短期大学紀要 総合編』 29: 23–36.
- 江連和章(2013)「日英語の事象無効化—因果連鎖構造からの分析に向けて—」 *Sophia Linguistica Working Papers in Linguistics* 61: 187–201.
- Grice, Paul (1975) Logic and Conversation. In: Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41–58. New York: Academic Press.
- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin (1999) Scalar structure underlies telicity in “degree achievements”. In: Tanya Mathews and Devon Strolovitch (eds.) *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT)* 9: 127–144. Ithaca, NY: CLC Publications.
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論——』東京：大修館書店。
- Ikegami, Yoshihiko (1985) ‘Activity’ - ‘accomplishment’ - ‘achievement’? A language that can’t say ‘I burned it, but it didn’t burn’ and one that can. In: Adam Makkai and Alan K. Melby (eds.) *Linguistics and Philosophy: Essays in Honor of Rulon S. Wells*, 265–304. Amsterdam: John Benjamins.
- Jarkey, Nerida (2015) *Serial Verbs in White Hmong*. Leiden/Boston: Brill.
- Jenny, Mathias (2001) The aspect system of Thai. In: Karen H. Ebert and Fernando Zúñiga (eds.) *Aktionsart and Aspectotemporality in non-European languages*. Zurich: Seminar für Allgemeine Sprachwissenschaft, Universität Zürich, 97–140.
- Jenny, Mathias (2005) *The Verb System of Mon*. Zurich: ASAS.
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版。
- 春日淳(本巻所収)「ベトナム語の事象キャンセル——ハノイ方言についての一報告——」
- Kato, Atsuhiko (2014) Event cancellation in Burmese. Paper presented at the 24th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Yangon.
- 加藤昌彦(2015)「ビルマ語の事象キャンセル」 *EX ORIENTE* 22: 1–36.
- Kato, Atsuhiko (2018) Entailed and intended results in Japanese and Burmese accomplishment verbs. In: Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 173–192. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.  
<https://doi.org/10.1515/9781614514077-006>
- 加藤昌彦(本巻所収)「ポー・カレン語の事象キャンセル」
- Kennedy, Christopher and Louise McNally (1999) From event structure to scale structure: Degree modification in deverbal adjectives. In: Tanya Mathews and Devon Strolovitch (eds.), *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT)* 9: 163–180. Ithaca, NY: CLC Publications.
- Kennedy, Christopher and Luise McNally (2005) Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81.2: 345–381.  
<https://doi.org/10.1353/lan.2005.0071>

- Koenig, Jean-Pierre and Nuttanart Muansuwan (2000) How to end without ever finishing: Thai semi-perfectivity. *Journal of Semantics* 17: 147–184.
- Martin, Fabienne (2019) Non-culminating accomplishments. *Language and Linguistics Compass* 13:e12346.  
<https://doi.org/10.1111/lnc3.12346>
- Martin, Fabienne (2020) Aspectual differences between agentive vs. non-agentive uses of causative predicates. In: Elitzur A. Bar-Asher Siegal and Nora Boneh (eds.) *Perspectives on Causation: Selected Papers from the Jerusalem 2017 Workshop*, 257–94. Dordrecht: Springer.  
[https://doi.org/10.1007/978-3-030-34308-8\\_8](https://doi.org/10.1007/978-3-030-34308-8_8)
- 三上直光(1984)「タイ語の使役文の意味的特徴について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』16: 205–216.
- 峰岸真琴(1986)「クメール語の動詞連続における/baan/の意味について」『東京大学言語学論集'86』45–57.
- 峰岸真琴(2007)「孤立語の他動詞性と随意性：タイ語を例に」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』205–216. 東京：くろしお出版.
- 峰岸真琴(本巻所収)「タイ語の事象キャンセル」
- 宮島達夫(1985)「「ドアをあけたが、あかなかった」——動詞の意味における<結果性>——」『計量国語学』14.8: 335–353.
- 岡野賢二(2014)「日本語と似て非なる言語～ビルマ語～」東京外国語大学語学研究所(編)『言葉とその周辺をきわめる』(東京外国語大学オープンアカデミー2012 年度 後期開講講座 活動報告書) 1–21. 東京：東京外国語大学語学研究所.
- 岡野賢二(本巻所収)「ビルマ語の事象キャンセルについての一考察」
- Pardeshi, Prashant, Sonal Kulkarni, Peter E. Hook, Yasunari Imamura and Jae-ho Lee (2014) Entailment cancellation in Marathi with side glances at Japanese, English, Hindi, and Chinese. Paper presented at the 36th International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI-36).
- 坂本恭章(1985)『カンボジア(クメール)語入門』(昭和 60 年度言語研修カンボジア語テキスト 2) 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 坂本恭章(1994)「タイ語の thammaj<なぜ>と不随意動詞の下位分類」『アジア・アフリカ言語文化研究』46: 409–414.
- Santiago, Paul Julian (2015) Event cancellation and telicity in Tagalog. Paper presented at the 150th Meeting of the Linguistic Society of Japan.
- 佐藤琢三(2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』東京：笠間書院.
- Sato, Yosuke (2021) Action/result in Indonesian accomplishment verbs and the agent control hypothesis. *Oceanic Linguistics* 60: 263–301.  
<https://doi.org/10.1353/ol.2021.0017>
- 澤田英夫(1988)「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」『言語学研究』7: 73–110.

清水政明(本巻所収)「ベトナム語の事象キャンセル」

Singh, Mona (1991) The perfective paradox: or how to eat your cake and have it too. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 469–479.

Tai, James H-Y (1984) Verbs and times in Chinese: Vendler’s four categories. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics, Chicago Linguistic Society*, 289–296.

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara (2009) Resultative constructions with “implied-result” and “entailed-result” verbs in Thai and English: a contrastive study. *Linguistics* 47(5), 589–618.  
<https://doi.org/10.1515/LING.2009.020>

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara (2010) Syntactic and semantic discrepancies among the verbs for ‘kill’ in English, Chinese and Thai. *Proceedings of the 24th Conference on Language, Information and Computation*, 291–300. Tohoku University.

Tsujimura, Natsuko (2001) Degree words and scalar structure in Japanese. *Lingua* 111: 29–52.  
[https://doi.org/10.1016/S0024-3841\(00\)00027-9](https://doi.org/10.1016/S0024-3841(00)00027-9)

Tsujimura, Natsuko (2003) Event cancellation and Telicity. In William McClure (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, Volume 12, 388–399. Stanford: CSLI Publications.

Van Valin, Robert D., Jr. (1993) A synopsis of role and reference grammar. In: R. Van Valin (ed.) *Advances in Role and Reference Grammar*, 1–164. John Benjamins.

Van Valin, Robert D., Jr. (2004) Semantic macroroles in Role and Reference Grammar. In: R. Kailuweit & M. Hummel (eds.) *Semantische Rollen*, 62–82. Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Van Valin, Robert D., Jr. & Randy J. LaPolla (1997) *Syntax: Structure, meaning and function*. Cambridge: Cambridge University Press.

Vendler, Zeno (1957) Verbs and Times. *The Philosophical Review* 66.2, 143–160.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

山川太(2004)「いわゆる日本語の Event Cancellation について」『日本言語学会第 128 回大会予稿集』 227–232.

Zhang, Anqi (2018) On non-culminating accomplishments in Mandarin. Ph.D. dissertation, University of Chicago.